

梟物語

泉鏡花作

一

別院べつゐんの森もりの梟ふくろふは驚おどろいたといつた。――梟かは年としひ

久さしく此常願寺このじやうくわんじの森もりに住すんで、夜よな／＼居廻ゐまはりを求あ獵さつ

て歩あるくが、今夜こんやも塀へいの上うへの、繁しげつた櫿かしの枝えだに灰色はひいろの

姿すがたを顯あらはし、近來人魂ちかごろひとたまが出でるといふ風説うはさの高たかい、新井あらみ

の火葬場くわさうばの方ほうへ出掛でかけようか、狐きつねの穴あなのある深谷ふかだにの

あたりへ參まゐらうか、おもかげ橋ばしの幽靈いうれい榎えのきへ行いつて見み

ようか、猿丸さるまるの夫婦杉めをとすぎを久々ひさ／＼で見舞みまはうか、畜生ちくじやう！

權現堂ごんげんどうの塹ねくらを搔廻かきまはして呉くれようかと、いたづらな

思案しあんをする腹はらを膨ふくらまして、葉越はし十六夜やの月明つきあかりに、

廣々ひろ／＼とした、薄墨うすづみで描かいたやうな、早苗田さなへだの緑みどり、向むかひ

の山やま、稻荷いなりの森もりなどを睨にらんで居ゐた。眼めの下したに銀色ぎんしよくを

帯おびて畝うねつて、北きたの方かたへ流ながる／＼小川をがはがある。市まちの中ちゆう

央あうを横よこぎるあたりで、鬼川おにがはと名なが附つくので、此この邊あたり

では唯常願寺たゞじやうくわんじの裏うらといふので、裏川うらがはとばかり俗ぞくに呼よ

ぶ。流ながれを隔へだて、土塀どべいに並ならんで、件くだんの火葬場くわさうばに通つうずる

土手どてがあるが、一條ひたすぢほの／＼と、石いしは白しろく、草くさの

生えた土は黒い。梟が二個の眼のきよとりとした正面へ、すた／＼と来て立停つた、婦人の風俗といふのが、洗ひ髪のさば／＼したのに黄楊の櫛、白と黒と段染の廣袖、花色裏を裾高々と端折つて、腰蓑を掛け、水色縮柄の蹴出、黒繻子の帯を前結、仔細に見ると、眉を落して鉞漿を着けた、年紀の頃二十五、これが人通の無い川沿の土堤の中央へ、月をあびて出たのであるから。――

婦人立停まると、一ツ貧乏搖ぎといふのをして、やさしい肩を動かしたが、顔を仰向けながらや／＼胸を反らすやうにして、ぐるりと廻り、今來た土手筋を月に透かして、

「あゝ、ほんに待たるゝ身になるとも待つ身になるなどは、好ういつたものぢや喃ツさ。」言尻を投げたやうにいつて、酒氣ある呼吸をすると、艶やかに黒い前齒が幽に見えた。婦人は噛んでた小楊枝をふつと吐出して、爪先で踏みつけたが、又ぶる／＼、酔覺の水の音が身に染むといふ形で俯向き、「おゝ、寒くなつた。ふむ、」とまた笑つて、「手数が懸るんだねえ。」其の兩手を懷つたまゝ、萎えたやうな廣袖を、右へ、左へ、搖動かし

て、足を踏違へながら持餘ましたといふ身で、フトむかうを見た。

「あゝ、ほんに待たるゝ身になるとも待つ身になるなどは、よくいつたものぢやなあ、とおいでなすつたね、あい、あい。」と云ひながら、つか／＼と前へ出る。

土手を一町ばかり隔つて、まばらに細い柳の樹の下に、きら／＼巻いて揚げ、水を突落して、氷柱を植ゑたやうな水車が、がう／＼と陰気に廻つて居る傍へ、二人の人影。いづれも小造で優形なのが、竝んで見えたが、段々離れ／＼に近づいた。

「来た、来た。」と呟いて、踏出した片足を引いて立ち、踵を揃へて伸上るやうにして、

「ほんに、待たるゝ身になるとも待つ身になるなとは、よくいつたものぢやなあ。」更めて繰返し、仰山らしく眼を二つて、

「おゝ、うはさをすれば影とやら、むかうへ見えるはお二人さん、おゝい、おゝい。」と此は冴え

た聲、小手招をしながら、

「チチ、トチチリシヤン、チン、トチチリチチテ  
リトチチリシヤン。」と口三味線、壁を塗るやう  
な手附で躍らうとして、生れかはつたやうに又肩を  
揺つた。

「串戯ぢやあない、一寸、おゝい／＼。」

「不<sup>い</sup>可<sup>か</sup>んなあ、い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>んなあ、そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>な、そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>な聲<sup>こゑ</sup>を出<sup>だ</sup>して聞<sup>き</sup>えるよ。お前<sup>まへ</sup>、」と、男<sup>をとこ</sup>が舌<sup>した</sup>たるいものゝいひやう、隅<sup>すみ</sup>田<sup>だ</sup>川<sup>が</sup>戀<sup>は</sup>佛<sup>ひのおも</sup>に、お勤<sup>かん</sup>といふ婦<sup>をんな</sup>人に扮<sup>いで</sup>装<sup>た</sup>つた中<sup>ちゆう</sup>年<sup>どし</sup>増<sup>しま</sup>の顔<sup>かほ</sup>を怨<sup>うら</sup>めしさうに見<sup>み</sup>たのは、色<sup>いろ</sup>の白<sup>しろ</sup>い、丸<sup>まる</sup>顔<sup>がほ</sup>の、おつとりした、品<sup>ひん</sup>の好<sup>い</sup>い、但<sup>たゞ</sup>口<sup>くち</sup>許<sup>もと</sup>に緊<sup>しまり</sup>の無<sup>な</sup>い、耳<sup>みみ</sup>の薄<sup>うす</sup>い少<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>で、青<sup>あを</sup>々<sup>／＼</sup>と小<sup>ちひ</sup>さく、格<sup>かつ</sup>好<sup>かう</sup>の好<sup>い</sup>い、すつぺりとした、剃<sup>そり</sup>立<sup>たて</sup>の坊<sup>ぼう</sup>主<sup>ず</sup>天<sup>あ</sup>窓<sup>ま</sup>。撫<sup>な</sup>肩<sup>がた</sup>の中<sup>ちゆう</sup>背<sup>ぜい</sup>で、絹<sup>きぬ</sup>せるの單<sup>ひとへ</sup>物<sup>もの</sup>、自<sup>しろ</sup>足<sup>たび</sup>袋<sup>び</sup>に雪<sup>せつ</sup>駄<sup>た</sup>を穿<sup>は</sup>いて居<sup>ゐ</sup>る。

「だつて何<sup>なに</sup>をしていらつしやるんだか、遅<sup>おそ</sup>いぢやありませんか。あなたなんざ、お商<sup>しやう</sup>賣<sup>ばい</sup>もので何<sup>なん</sup>とも思<sup>おも</sup>やなさるまいがね、二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>で竝<sup>なら</sup>ばれちやあ附<sup>つ</sup>いて歩<sup>あ</sup>行くのが恐<sup>おそ</sup>れだから、さきへ駈<sup>かけ</sup>出<sup>だ</sup>して來<sup>き</sup>たなあ可<sup>い</sup>いけれど、新<sup>あら</sup>井<sup>ゐ</sup>の三<sup>さん</sup>昧<sup>まい</sup>が眞<sup>ま</sup>正<sup>つしやう</sup>面<sup>めん</sup>に見<sup>み</sup>えますよ、恐<sup>こは</sup>くつて仕<sup>しやう</sup>様<sup>うつ</sup>がないんだもの。おゝい、おゝい、かなんかで、よろしく景<sup>けい</sup>氣<sup>き</sup>をつけて居<sup>ゐ</sup>たんでさあね、なんだつてまた道<sup>みち</sup>草<sup>くさ</sup>をなさるんですよ。」

絹<sup>きぬ</sup>せる、白<sup>しろ</sup>足<sup>たび</sup>袋<sup>び</sup>、青<sup>あを</sup>道<sup>だう</sup>心<sup>しん</sup>の少<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>は、其<sup>そ</sup>の首<sup>くび</sup>を煉<sup>ねり</sup>の

人形の如く白襟の上に据ゑながら、ばち／＼と瞬いた。

「私は知らんよ。これが、何ぢや、遅う歩行くかな。」「といつて、にた／＼莞爾ついて顧みる。後へ下つて立つたのは、きりつとした眉つき、眼鼻立勝れた容色、細面で凜とした、口許に柔優さの見ゆる、愛くるしいので、年紀は十六七、わりあひに背の高い、すらりとしたのが、前髪を取つて鬚の根へ白の元結をぐいとかけた、はけさきのばさ／＼した、茶筌といふのに房ざりと結び、白襟を襲ねて、藤紫の紋着しつくりと姿よく、緞子の男帯を乳の膨らまない細い胸に、胸高にめて、小さ刀を帯にさした、腰には歌留多結びといふ扮装、これはおなじ歌舞伎の主殿之助といふのである。

「通ちゃん、お前、其姿でづつと氣取つて、新地から練つて來ましたね。」「

「厭ですよ。」「

「いゝえ、お祭は三日で今日は濟んだし、舞臺ばかりぢやあ食足りないや、樂屋で座敷着になるさへ

惜をしいもんだ。第一だいお前まへ、浅野屋あさのやの女将おかみさんが婦人をんなながら染々しみ／＼惚ほれたといつたぢやあないか。お姫様ひめさまも、武者修業むしやしゆげふも、奴やつこも、五人男にんをとこも、今度こんどの踊子をどりこでお前位まへくら似合みにあつたなあないのだもの、一寸ちよいとこれ見みせたいやね、ねえ、三位様さんみさま。」

「ふゝゝゝ、」  
「存ぞんじません。」といつて極きまりの悪わるさうに片手かたてを、傾かたむいた其類そのほゝにあてた。

「ですから貴方あなたも此姿このすがたのまゝでお連つれなすつたんですねえ、お寺てらにやあ打うつてつけの装なりだ。女人禁制にょにんきんせいのお宗旨しゅうしだつて此これなら参話おまありの大檀那おほだんなの前まへへ、目八分めはちぶにお茶ちやを持もつて出でられますからねえ。こゝで三位様さんみさまお思おもひつき遊あそばして、茶屋ちややでお酌しやくも鼻はなについた、お居室おまでお給仕きふじをさせて見みようといふお物好ものずきさ。何なにが幸福しあはせになるか知しれないもんだよ。何どうして御珠數おじゆずをかけてお念佛ねんぶつを唱となへるやうぢやあ、敷居しきゐの外そとへも参まゐられない。別院べつゐんの若様わかさまのお居室おまへ通とほて、お寢室ねまへ参まゐつて、しつぽりと、お休やすみなされ遊あそばしたら、おみづからは然しかるべうさ、通かよちやん嬉うれしいだらう。」

廣袖ひろそでから出した長い手の、白々しろ／＼とした氣味きみの悪い指ゆびの尖さきで一寸突ちよつとつかれて、通かよふといふのは身體からだを縮ちぢめた。

「存ぞんじません。」

「だつて、あなたが御存ごぞんじだねえ。嬉しいでせ

う。」と、かへす手で新發意しんほちの背せなかを一打ひとつち。

「ふゝゝゝ。」と此人このひとはまた笑わらうてばかり。

お勘はあたりを見て空を仰ぎ、

「串戯は止して晩くなりませうから、あなた可いんですかね。お城の石垣のやうな用心堅固な、此土塀の中へ入れますかい。」と屈むで流れ越に塀の壁の、月夜に堆いのを差覗く。

新發意は頷いて、

「可いの、可いの。お晝ツから、あの、そつと錠をはづして置いたから可い。」

「ぢやあ通ぢやん、手筈通り此川を渡るんだ。そんな姿ぢやあ下可いや、支度をおし、支度をおし。」

「浅いんでせう。」といつて、主殿之助は新發意の色を窺ふ。トまた頷いて、

「膝までツきやありやせん。」

「それだツたつて、長裾で渡られるもんですか。

舞臺ぢやアあるまいし、眞個の追行にお前、そんなに色氣ぶつちやあ仕やうがない。ぐいと端折つて、

さあ、煤掃といふ形になるのだ。もう、晩いぢやあないか、じれつたい。」

とお勘は衝と寄つて、主殿之助の前に腰蓑をずらして踞ひ、片手で抱上げるやうに弱腰をぐいと占めて、あれといつて浮足になつた片々の草履を、もぎ離すやうにして脱がせると、しつかり肩に手をついて、

「可ござんすよ。」

「可うござんすぢやあないわ。」 袂を掴みながら

ら見返つて、

「あなたもお支度を遊ばせよ。」

「あゝ、おりや、男だからわけはないよ。」と、新發意は既に跣足になつて雪駄を撮み、裾を端折つて、白い足を揃へて、引上げる女の褌を嬉しさうに視めて居た。

「姉さん、お前さんも一緒に来て下さいまし。」

と主殿之助はかゝげた裾を、白地の手拭で男帯に巻き添へながら言つた。

「お前もねえ、私やまだこれから世界があるんだあね、愚圖々々して居られやしないんだから。」  
と其まゝあひての帯の眞中を一ツ叩いて離れて立つ

た。お勘は襟を合はせて身繕ひをして、

「ぢやあ可ござんすか。」

「だつて恐いやうなもの。」

「いま更そんなことを言つたつて仕やうがないやね、活佛様がついておいでなもの、何が恐いもんですか。あなた、手を引いてお遣りなさいよ。」

「きまりが悪いもの。」と新發意はうぢ／＼する。

「さあ、通ちやん、さあ、」

「だつて、何ですか。」

「えゝ！ じれつたいね、此位なことを、」急  
込んでいつて調子をかへ、

「何だね、お前。」と向直つて、のみこんだ

いふ顔色。目配せをされて、頷いた主殿之助は、思  
ひ切つた風で、つか／＼とお勘の前を横ぎつて、走  
り寄つて、

「あなた、さあ、」と兩手を新發意の腕にかけ  
た。藤紫の八尺袖が、揺れつゝ絹せるの袂に層なる。

「大丈夫だよ、大丈夫だよ。」莞爾々々しながら

ら、新發意は何か工合の悪さうな顔色で、振返つて  
うしろなるお勘を見た。

此方は眞顔になつて、丁寧ていねいに小腰ここしを屈かめ、

「お静かに、」とばかりで、くるりと踵きびすを返かし  
たから、二人は搦からみ合あつたまゝ、礪原こいしはらに草くさが生はえて、  
流ながれの幅はがちよろ／＼と溢あふれ懸かる、月つきあかりの汀みきはに立た  
つて、齊ひとしく川かはに臨のぞんだ時とき、小戾こもとりしてうしろから、  
「お静しづかにとばかりで二階にかいから駈落かけおちをした大盡だいじんが  
あつたとさ！」

「厭いや！ 姉ねえさん。」と振返ふりかへる、と一所いっしょに見返みかへつ  
て新發意しんぼちはにやりとする。

お勘は判然はつきりした高聲たかこゑで、  
「御機嫌ごきげんよろしく。」

#### 四

此晩忍込まうとして、新發意が豫め錠を外して置いたといふ、常願寺の非常口。川から石段を三ツばかり蹈んで入る木戸の處、梟の居る眞下のあたりで、石段の上に蹲むで、白い切を流に浸し、ちやぶ／＼其肌着を洗つて居るのは、作藏といふ鐘撞である。が着て居る着物の色は黒し、踞つて居て顔は見えず、口の裡で、つぶ／＼と唱へて留まぬ念佛も、水の泡に紛れるから、燈臺下暗しで、天窓の上に二ツの二星、樹の間にかけた梟の輝く眼にも入らなかつた。

「あれ、石ニが崩れて、足の裏が擦ツたいねえ。」  
「それぢやから捉まつてお在といふに。」  
「可うございますよ。浅いから、」 水は太腹のあたりへひた／＼と絡ひ着く。

「おゝ、冷い。」  
ざぶりと一足踏出して、思はず膝を曲げて、雪のやうな、踵を出しながら向うへ振ると、練絹を亂したやうに、水は月に映つてさら／＼と切れて落ちた。流が疾いから、踏堪がなくツて轉倒らうとする。

「それ、危い。」と新發意慌てゝ二の腕のあたりを緊乎と取つて、

「斯うしておいでな。」

「撥つたいもの。」身ぶるひをしたが、振放すこともしかねた様子で、しばらく川中に立定む。

「おゝ、」と、思はず低聲でいつて、踞つたなり非常口で顔を上げて、鐘樓守の作藏は、ツイ眼のさきに艶を帯びた彩のある幻を、銀のやうな流の中に歴然と見たので、ぎよつとした。

譬へば霞を固めて拵へた兩個の姿、衣の綾も判然と分るばかりな、心から其胸も、腰も、透通つて、後へ土手の草が映るやう。どちらも水際の立つた美しさ、殊に異様な扮装をした少年の如きは、身の毛が悚立つばかり、綺麗で、物凄いやうである。作藏は瞳を据ゑて、瞬もしなかつたが、この男の眼は、猫の如く、我が鼻の如く、闇中に於て光るものではないから、月下の錦繪は、いづれも人ありと心着かず。

「疾くお歩行き、もう一思ひぢやないか。」  
「何ですか冷い蛇が巻きつくやうで、私や氣味が  
悪い。」

ものをいふから、作藏は打傾いて、左の大きな耳  
を水の上へ出して聞かうとした。此の男は、餘り類  
のない、妙な不具者で、二ツを一にした位、左の耳  
が見事なかりに、生れつき、右の片耳が無いので  
ある。たゞ右の耳のない不具であるばかりでなく、  
鼻といふものが極めて低い、下唇の反つた、眼の窪  
んだ、鼻の下に髭らしいものゝ生えたことのない、  
天窓のすべりと禿げた異相な親仁で。常願寺の鐘を  
撞くことゝ、表門を開閉する他に能はない。兎とい  
つて耳を引張つても腹を立てず、越後の獅子はと其  
の唇を撮むでも腹を立てるといふことはない。それ  
かといつて、をかしい事も笑ひもせず、佛性で柔和  
忍辱なのであるかと思ふと、急にお天氣が變つて晴  
れたといつて血眼になつて怒るから、凡人に計り知  
られぬ龍の如きものかと思ふと、寫眞屋の角で、婦  
人の寫眞を茫乎眺めて居ることがある。面と向つて  
は、苟も阿呆だの、馬鹿だのといふものはない。誰

も皆先生といひ、隊長といひ、いよ活如來といった  
り、また、其れ何うだ色男といつて見たり。

五

一體何處の生れだか分らない、常願寺の縁の下から五位様が拾ひ上げて、お育てなされたとはかり。まくりを飲む時分から寺に養はれて居るのであるが、先に鐘撞だつた同名の作藏といふ老人は、年紀六十を越えて色狂氣になつた、大方其の落胤で、門前の花屋が内の赤犬が産んだものであらうといふ。

また罰の當つた説に因れば、五位様いまだ弱年の時、冥加金の納められない信者があつて、金の代にといつて差上げた女は、いふことを肯かうとしない、最も従はぬものは手足を動かして自由にならないからといつて、縛つてあつたが天死をした。其の忘れ形身であらうといふ。これは他宗のものゝいふことだから、然もあるべきことでもなからう。

作藏は阿呆だけれど、經だけはよく覚えて、夜中正信偈を口ずさむ聲の好いことゝ云つたらない、居まはりの者はよく聞くことがある。いふまでもなく、無雙の信者で、此の男と、常願寺に在るもの――

先づ上は五位様。

――

忝くも五位様は、連枝とかいつて、比翼連理の枝ではない。其威も、其徳も、其位も、其勢も、其力も、其寺も、また其顔色も、でつぶりと肥つて居ることも、同行の衆はよくお掛物で拜んで居よう、彼の活佛の何かにあたらせられるので。此國はいふに及ばず、隣國六ヶ國では家元の活佛とおなじやうに尊信して、其が本尊ならば、これは御影、其がお釋迦様なれば、これは阿彌陀様、其が親なればこれは兒で、其が六尺の御像なれば、此は一尺の御像、寺も堂も造、形が小さなばかり、殆んど同じものである。つまり形だけが小さな佛だと信じて居るので、また其に違ひはないが、違がないからといって、小佛様では聞えがよくない。勿論堂の下の小佛がなどと、節をつけていふことはならぬ、これは活佛である。

若様、若君、お新發意、或は若殿、ちよいと若旦那、坊ちゃんなどと失禮なこともいふ。いづれもおなじ意味で、件の五位様が跡つぎの一人兒、三位様

といふのである。名づくるに因つて其人に異なること  
はないが、場合が違ひますさ。はじめのは講中の善  
女人、檀方、末寺などが申す言で、あとは大抵そ  
こいらでいふことだ。 通 〓 (はい、若旦那)  
と恚ういふ工合。即ち鯉屋の抱へで通といふ、豫  
て御鼻肩の藝妓が、今度祭禮の手踊に、主殿之助を  
勤めた、美少年の姿が他愛もなく氣に入つて、姿を  
其まゝで座敷に呼むで居たのを、夜に入つてから今  
連れ込まうとする、新發意が其である。

次に御臺様、御簾中、碎けて奥様ともいひ、また  
店の方を表に見立てゝ、お裏様ともいひ、ずつと令  
夫人といふ者もあるが、但こゝに腰元の内に園とい  
ふのが一人、内證で姫様と申上ぐる。

其の譯は、の御臺になつて居らるゝが、舊藩主な  
にがし侯の第五の姫であつた。維新の時、藩侯居、  
居を東京に移すについて、傳役に託して此寺に預け  
置かれたが、十五の春、一度父君のもとに引取られ  
て、麻布の別邸で、二十の年紀まで齊眉かれたのを、  
舊藩の臣で當時此縣の知事をして居たのが媒介をし

て、首尾よく御縁組なすつたゝめ、媒灼は三千圓貫  
つたが。典薬の室で、其時分外國語の讀めた、劍の  
使へた、書の上手な、眼の鋭い、心の優しい、名高い  
美人の、操正しい女丈夫で、姫が五才の時から十五  
年傍を放れないでお育て申した阿松といった乳母は  
血を吐いて死んだ。

お上はこの三人、他は僧も、俗も、權助に至るま  
で、幾人か――極樂が眞個にあると思つて居る  
ものは一人もないが、  
・  
・  
・  
・  
作藏は信じて疑  
はない。

他は皆現世で樂を得ようとするが、作藏はたゞ後生を願うて、未來を助からうと思つて居るらしい。

縁の下から拾ひ上げられて、板の上で、藁の中で育つて、それから追廻しに、納所小僧どもに使はれて、何のあてもなく、四十になるまで、毎日するだけのことをしては、寝る、起きる。おなじことを繰返して、始終口に念佛を絶やさないのは、簡単にこれで成佛をしようといふのである。

縁を掃いてる時も、草を雀つてる時も、鐘撞堂に上つた時でも、遂に一度も後生を願はぬといふことはないの、難有い、難有い、と心から人にいふのであるから、いま非常口で肌着を洗つて居ても、不思議な幻に眼を二つた時も、耳を傾けた瞬間にも、矢張同じことを思つて居よう。

南無阿彌陀佛、戀無常、此方はまた若い同士、三位は立綻むだ主殿之助の手を引動かして、

「何うしたの、此處で立つてちやあ困るなあ。」

「あなたは何ともありませんか。」

「おりや、晩くなつて表門の閉つた時、お前の所へ出掛けるのには、何時も此處を渡つて行くで、ちやんと心得て居る大丈夫ぢや。」

あの聲は若君ぢや、南無三、魅せられてござるさうな、と思ふ中、流を亂して、しやにむにつか／＼と近づいたから、作藏は、雫も切らず洗つたものを引きずりながら、身を翻して兎も角も引込んだ。

「あなた、」と非常口の石段に踏みかけて、片足なほ水に浸しながら、主殿之助が透かして見て、  
「何うしたんですね、戸が開いて居るぢやあゝりませんか。あなた開けてお置きなすつたの。」

「いや、開けて置きはせなんだのぢや。」と新發意も逡巡する。

手拭を解いて、一旦おろしかけた褌をば手に取り、  
「薄氣味が悪うございますね。誰か隠れて居てつかまへられるんぢやあゝありませんか。」

「何そんなことはない。はてな。」といひながら、新發意は屈むで非常口の裏を透かして覗いた。と二人は肩をならべて、袂をかさねあつた、萩薄、川に濡れて露を置いた姿のまゝ、伸上つて背後を振り向き、川の向の土手のあたりを衝と見込む。

東へ十町ばかり、早苗田を隔てゝ、あからさまに見ゆる、新井の煙筒が、中天に聳えて、かすれ／＼に煙を吐く。其火葬場の裏は、湯の山道の松並木で、ちやうど追分節を唄つて通る。

忘れしやんすな　――　此の山道を　――　東  
や松原　――　西や薬師　――

聲は見通の野の裾、田畝は處々の樹立を潜つて、遮るものがないから一杯に廣がつて響いたが、遠山の巔を越えて、隣國へ辻つたと思はるゝ、忽ち森として、流の音が身に迫つた。

「おばけ。」

「あれ。」

「ふゝゝゝ、弱蟲だなあ。」

と御機嫌な新發意は、敢て禍するものゝ無いことを今確め得て、綽々として餘裕があるので、ずつとお強く、

「女といふものは為やうのない臆病なもんぢや、何がおばけぢや、馬鹿！」と頼母しい事を仰せられる。

築地の上で、ノツホー、と唐突にたまりかねて鼻が叫んだ。

「わツ、」とうなされた聲で、新發意は射込まれたやうに、非常口へ、絹せるの細い身體は天窓から足の裏まで、横ざまになつてすぱりと入る。

## 七

「まあ、—— 取残された男装の美女は眉を  
 顰めて空を仰いだ。」

さきにもいつた如く、鯉屋の抱妓で此の通といふのは、土地で名高かつた山地六慶といふ彫刻師の一人女で、父は四年前に亡くなつたが、其世に在つた時、女が十四の年紀、會津商人で淺野屋といふのに逗留をした客が、黄金無垢の縁頭、雌雄の唐獅子を浮彫にしたものを持つて来て、これを溶かして指環を一箇拵へてといふ註文をした。なにがしといふ銘はないが、奇代の名作と、六慶は震ひついて、壊すのが惜くてならない。で、わざ／＼客が許へ出向いて行き、懇に其まゝ秘藏して置かるゝやうに、果は角目立つまで勧めたけれど、お前に出来ぬなら他へ頼む分の事、とばかりで、些とも肯入れなかつた。

六慶は突戻して、一旦は歸つたが、客は何がなし唯然る唐獅子の縁頭より指環が欲しいのであるから仕方がない。其まゝにして置けば、名も無き飾屋の

手に懸つて、獅子は爐茶碗の中に溶けて、黄色な、豆粒ほどな、貴金屬に化してしまふであらう。せめては我が眼に目覺い其細工振を殘留めて、少なくとも六慶が手で介錯をしようと思つた。

で餘儀なく鑄壞して指環にするからといつて、再び縁頭を客の手から請取つたが、見れば見るほどの垂るやうな鑿の冴、到底、世の中からの雌雄の唐獅子を取り去るに忍びなかつたが、かやうな男にありがちで、家計更に整はず、貧しさ洗ふが如しであるから、それだけの量の黄金を買つて、取替へるわけにはゆかず、心あたりの好事の家を説いて、買はせようとしたけれど、まことは光琳の畫のまゝな、彫刻といつても可い、氣合を見せたばかり、ぼんやりとした作で、念所が利いて居ようが、品物が活きて居ようが、左様なことを衆は頓着しないので、何かごりや綿で拵へた兎のやうな、ぼんやりした獅子ぢやないか。せめて此の眼玉に金剛石でも入つて居りや、一番掘出して見る氣にもなるけれど、なぞと蟲のいゝことをいつて、一向取合はないから、術盡きて自分償はうとするのに、資金はなし、日が経つ、

催促さいそくをされるといふので、六慶りくけいは細工盤さいくばんの上うへで、たゞ惚々ほれ／＼と見みながら溜息ためいきを吐ついて居ゐると、女房にようぼうは舊左裃もとひだりじまを取とつて鳴ならしたものであるから、峠たうげは杣そまが越こすわけけで、女なを鯉屋こいやに預あづけた。これを六慶りくけいは黙諾もくたくしたので、途つひに勤しんをすることになり、袖そでといふ名なを通かよといひかへることになつたのである。

粹いきな母親はくおやは心こころから堅氣かたぎに返かへつて居ゐたので、稚さない内うちから女むすめに撥ばちらしいものも持もたせなかつたから、遊う藝げいの嗜たしなみはちつともなかつたが、針刺はりさしの涼すずしき鯛たひの眼まなこかな、押繪おしゑ、細工さいくものなどは、紙かみの切きれで鶴つるを折をる時じぶ分から上手じょうずであつた。しかし、客商賣きやくせうばいをするのに香かう箱はこを拵しつひへて居ゐては追おつつかないから、蠟燭らふそくの心しんも切きる、銚子てうしをかへに立たつ、太鼓たいこを打うつ、躍をどりもする。今夜こんやの如ごとく川かはを渡わたつて、新發意しんほちが閨ねやへ引ひき入れられることもある。が袖そでは辛つらい思おもひをしぬいて、藝げいばかりで通とほして居ゐた。

なげき疲つかれて、うと／＼と寢ねた暁あかつきの夢ゆめに、父親ちちおやの六慶りくけいが天窓あたまを剃そつた、青道心あきだうしんの形かたちで、紫むらみきの袈裟けさを着きて、枕頭まくらづかひに悄しんぼ然りと坐すわつて、

（堪忍しねえよ、袖、早く苦界をぬけてくれねえ  
ぢやあ、おいらア浮ばれねえ。） といつてほろり  
とした、夢を見た。家から夜があけて報知が来た。  
益々志が堅固になつたので、少いが其の志奪ふべか  
らず、人も處女にして通して置く。

お袖は奇聲を發した枝を仰いで、暗い中に圓々と  
して尻細な輪廓に光を帯びて、灰色の腹をあからさ  
まなる、皿の如き眼を二筒見た。

「人、馬鹿にしてるよ。」

「恐かつたか、おりや、もう吃驚した。」

「酷いよ、あなたは、」と、お袖は苦笑してひ

つたり寄添ふ。

二個の綿繪は、活返つて言を交はしたが、ハヤ廣庭の芝生を横ぎつて、木隠るゝ樹立もなく、空高くなつた月の下に、姿は青白く、黒い影を這はせながら、彩つた幻の動くやう、胸を見せ、背を向けて、入違ひに纏れながら、忍足で窺ひ寄る。

斜何に二十間ばかり、むかひの築山の暗い中から目の前まで、雨戸がひつたり閉つて建連なり、恰も灰色の虹が渡つたやうな、中をば六尺ばかり傍へ寄つて、新發意はソと耳をあてた。

「ちよいと、此處から入りますの。」

新發意はこれに答へないで、腕組をしながら、う

つむいて何か仕こなしぶり。

袖はそは／＼して急込んだ風で、



入ると前を向いて、屈むやうにして隅々を透かしながら、

「忍梅様、あれ、もし忍海様、はてな、お庭だと思つたが、」 伸上つてあたりを見たのは、色の黄な、でつぶりと頬肉のある、四十ばかりの中婆様。髪は薄いが黒々としたのを、おばこといふのに小さく結つて、短な銀笄を指込むだ、ちと抜衣紋。なりは低いが一斗樽ほどな身のふとり。歩行くと膨らかに 締めた帯にひだを打つて、だぶり／＼とする。が、しつかりものゝ裾短かに、手足をしやつきりとして效々しい、す、べて三途河の婆あは瘦ツこけてるが、常願寺の婆さんは肥つてるといはれる位、これは取しまりの女中頭である。婆はふくれた腹の中へ両手を揉込むやうに帯に挟むで、

「はアてな。」

「これ。」

「はッ、」 といつて振向くと、小袖垣の際に、呼んだは承知ぢや、といふ様子で、月下に老和尚御立ちあり。

「これはまあ、」 と揉手をしながら、摺足のつ

もりだけれど、餘り肥えてるからよた／＼と近う寄る。

鷹揚に、懷手。頤をもて、「何ぢや。」

「いえ、もう何ぢや處でござりますか。あの、何でござります、奥様が、今夜といふ今夜は、行らつしやりますことにお心が直りました。」

「しつかり、御褒美ものでござります、大抵骨を折つたことぢやあござりません。」と女中頭はしたり顔に、しかも重荷を下ろして、がっかりしたやうに云つた。聞き／＼執事は懷中から手を出したが、其の頤の先を一ツ大風に叩いて、

「眞個かな、嘘らしい。何か、汝、早合點ぢやらう。」と氣の乗らない返事である。

襟をしごいて、女中頭は首を据ゑた。

「それでござりますから、屹と御褒美ものぢやと申すのでござります。月極のお世話ぐらあ手の懸りませぬものならば、甘いお茶でも頂けば濟むのでござりますよ。あなた、」

「眞個なら汝出来したものだ。あの奥方が折れたと申すと、こりや貴様には分るまいがの、（天柱挫け）と云つたやうなものぢや。・・・奇代だわえ。」

「何を考へていらつしやります。其の、（初中食氣）とやらでござりますかい。」

「何を申す、はゝゝゝ、いや、しかし汝何といつて口説き落した。あまり不思議ぢや。」と執事忍海は、自分が引導を渡した亡者が迷つて出た時の様な、むづかしい顔をする。

「ぢつと見て、」

「それは斯う申したのでございますよ。ね、」  
といつて、女中頭は獨りで頷く。

執事も釣込まれてツイ頷き、

「ふむ、いや、なか／＼易いことではあるまい、口を酢くいたした位で済んだか。」

「いえ、何たつた一言でございます。」

「何、あの奥方が、嘘をつけ、口でいつた位でいふことを肯かるゝものか。御前様もそれ承知で東京からお呼びなされたぢやが、汝は中年から参つたのぢやで能くは知るまいがの。お小さい時から此の寺でお育ちなされて、私なぞはよく存じて居る。お氣の荒い、鋭いお方で、七八ツの時分から名代のむづかし家、お氣に入つたものといつては、お園と、池に居る隻眼仙人。のそれ、片一方眼の潰れた鯉。あれは鮠にかけられて、既に喰はれさうな處を、姫様

欄干から御覽なされて、お召もそのまゝで池へ飛下りてお助けなされたぢやが、もう彼是十八九年にもなる今まで長命して居る、化物のやうな薄氣味の悪い奴な。あれと、阿松殿といったお乳の人の倅で讚平といった乳兄弟。紋着の振袖でお相手に參つて居つた、それとあとにもさきにも二人ばかり。いふことを聞かつしやるのは、お乳の人の叱言ばかりで、誰が何と申さうが、思召を曲げられたことのないのぢや。されば氣に入らぬといつて、腰元どもを打擲なさるかといふに、左様ではない、痛いとも、痒いとも、口へ出してはおつしやらず、牡丹の花がぼた／＼と散つたといつて、見詰めて眞蒼になつて、ひきつけておしまひなされたことさへある、癩癬ぢやの。左様にまた、お氣の小さいのかと思ふと、其癩、一度も、お對手のお稚兒ぢや、讚平と二人で縁側に出ておみでなされた時、熱い、冷い、といふことも御存じない、それこそ冷水ではお洗ひなさらぬ手を蜂が刺した。それといつて讚平が手で拂ひ退けようとすると、袖で庇ひながら、「よしな、お前もさゝれるから。」とおつしやつて、ぢつと放れるまで、あの水晶のやうな目を二つて、瞬もせずに見ておみ

でなされたさうなり、御氣象が烈いのぢやな、傍か  
らは手も着けられぬ、嬰兒の魂百までぢやと、私ど  
も思つて居つた。案の定よ、御前様ぞつこんで、何  
うにか御無理の叶つたは可いが、御夫婦といふ名ば  
かりで、いまに五年越ぢやな。急に我を折られたの  
が眞個にならぬといふ、わけを申すさへ恚やうに長  
いわ、一言で肯かれやう譯は無いちや。」

「なるほどお小さい時其の位なことはござりましたらう。私もいろ／＼苦界を見て参りましたけれど、此度のやうなことはござりません。金と力といふものが、兩方とも利めのないのでござりますから、それは／＼難儀をいたしました。第一長煙管でねつ／＼といぢめ、なんといふことは、怪我にも出来ませんのでござりますから、手におへません。」

嫌ふにも、靡くにも、女といふものは大概數の知れたものでござりますに、あのやうな剛情な方は世間にあるものぢやござりませぬ。尤もまあ、あの位な御容色も澤山はござりますまい。お位の高い、柔味のない、地體御身分でもござりませうが、堅くつては頭が痛むとおつしやつて、大きな括枕を遊ばして、お顔へ半分天鷲絨の襟を引被つて十一疊のお居室の眞中にすや／＼と御寝なすつて在らつしやる時なんざ、何か眼に見える神々様がお姿を圍むで御守護なされていらつしやるやうで、いかさま御前様がお運びになり憎さうに見えます。ちよい／＼お枕

許一間ばかり此方からお引返しなされることもあつたげにござりますよ。とかくはおうまれつき、男嫌ひに出来ておいで遊ばすか。其とも上つ方だから御先祖傳來の魔除のお禁厭でも御存じなのでござりませうか。」

「これ、魔除とは酷いことを申すな。いや、しかし申すも憚りぢやが、あまり人間並のお顔色ではないよ。其をまづ素人眼には佛様と見えるで持つたものぢや。」と、つく／＼取澄まして眞面目でいた。

「まあ、いかなこツても、」  
「眞個ぢやよ、昔天竺へ參る道に、好色の妖精で、大王があつたさうな。これが汝、女のうつくしい弱い國から姫君を一人奪うて來をつたて。心持御前様は、色は白いが、是にそつくりであらつしやるよ。したが其姫君は仙人から授かつた毒針の毛裘を、すつぱりと身體に巻いて居られたで、魔王殿は唯玉に紅をさしたやうな、うつくしい顔を見て、ぶらんでいを煽りつけながら、上下組違へた劍のやうな牙の

間から、よだれを垂らすばかりで、三年の間手がつけられずに喘いで居たのを、たうとう汝、無垢の姫君のまゝで、孫呉空といふ猿の武者修業が助け出して、元の王様へ返したわさ。内の奥方は三年経つても、門端へもよう出さつしやらぬで、もう五年越ぢやが、矢張何か毒針の毛裘でも授かつてござるものであらう。見さつしやい、御氣象は烈しくつても弱々として、湯に召してさへ、目まひをなさるといふお身體ぢや。お寐間で羽ばたきをなされた處で、蝶々を押伏せるほどの手應もあるまいに、あの神通自在な魔王様が、頬ぺたに牙もあてないで、夜書眼をいからしながら、あへぎ切つてござるといふには、それ、奥方毒針の毛裘を纏うてござるでなければ理が聞えぬ。かやうなことでは、常願寺亂脈ぢやで、私はじめ氣を揉むぢやが、活きた人に土砂ふりかけて、手足を柔かにするといふ法もなしよ。これだけに重い荷が、さう軽々と片附いたといふは、……何か東海道を道中した化猫のやうで當にはならぬ。」

「處を、私がたつた一言で口説落しました。こゝが御褒美ものでございますのさ。」

女中頭は片頬笑をして、したり顔で居る。

「はて、嘘にもせい何と申した。」

「扇ならば要でござります。」

「可いさ、まづ何といった。」

「口傳ものでさ、お聞きなさりまし。」

「可いさ、まづ。」

「かうでござります。お執事の忍海様が、貴方に  
ぞつこんとばかりでね、」と女中頭は澄ましたも  
のなり。

元來、口傳などと、謂ふものは聞いて見ると案内なもので、あまり飛離れて居たから一寸は飲込めず、  
 「お執事の忍梅様があなたにぞツこんとばかりで  
 ね、――と繰返してしばらく考へた、やゝあ  
 つて忍海和尚は厭な顔をして苦笑をした。

「いや、大きにな、大抵其位なことぢやらうと思  
 うたよ。」

「何ういたしましたして、ほゝゝゝ、あなたが餘り眞  
 面目でもつて、一言で口説き落す法といふのを聞  
 きなさらうとおつしやるから、ツイまた其手で新し  
 いお浮氣でござりませうと思つて、憎いから言ひま  
 した。それはもう、新地や廓のならば、忍海様ぞつ  
 こんとばかりで、眞さかさまに血の池まで落ちませ  
 うけれど、」

「これ、餘計なことを申すな。」

「第一鯉屋のあれ、若様が御誓願の鯉屋の通が

姉、

」

「馬鹿をいへ。」

「角かどの蝋燭屋ろうそくやの二階かいにござらつしやるの。それがら、」

「これ、可いい加減かげんにせぬか。」

「お橘様きつさま、お萬さんまん、お梅どむうめ。まだ／＼、」

「いや、はや。」と忍海にんかい大おほわらはになつて、もう叶かなはぬ。女中頭ぢやうちうがしらはます／＼詰寄つめよつて、

「どれもこれも唯たゞ忍海様にんかいさまぞつこんとばかりで、二ふた言こととは返かへしませなんだでござりませうが、眞個まいたくの事こと、奥様おくさまはなか／＼そんなことで、何どういたして、何なんとしてもあなた。」と尻上しりあがりの早口はやくちで笑わらひながら疊たぐみかけると、眉まゆを顰ひそめて、苦にがり切きつて、

「愚ぐにもつかぬ、知しれ切きつたことを。汝きこそれを、何なにも、それをいふまでに私わしが事ことを引合ひきあひに出ださんでも宜よしいよ、苦にが々ずしい。」

「些ちつと少せうおたしなみなさりますが可よからうと存ぞんじましてさ、御意見ごいけんをなさらうといふ御身分ごみぶんで、飛とんだこをを教しへて、あなた、お新發意しんほちを引張ひっぱり出だして、弟あとう分ぶんにして女をんなをあてがふと云いふことが、何處どこの國くににござります。」

「はて、天竺にあることさ。」と警句を吐いて、忍漣上人少し旗色を直した。

「何も世渡の薬ぢやと思つて、一匙盛つたのが、ちと利きすぎたものぢやで、五臟六腑へ染込んだものと見える。からゝが弟子のぐどむは釋迦ぢや、私などは及ばんよ。汝今夜も非常口から連込んだのを知らぬか。いや、若武者盛だわえ。」

と深々と皺を刻んだ廣い額に手を加へる。其状恰もフト思出して、行懸になつてる話の道筋を忘れて、雨戸の奥へうつかり氣を取られ畢ぬ、と見えたから、女中頭はフンといつて、鼻の頭をわきへ向けた。

「嗚お氣が揉めませうよ。いなこツても、ふむ、」  
とまた一つ、忍海上人は莞爾として、

「これは迷惑な、第一年紀がお前、」  
「此節は少いのに限りますとさ。」と頤を空に向けて、低い鼻の上で斜めにした、其眼色といふものが、容易でない。

忍海は悦に入つて、  
「馬鹿をいへ、七才の龍女だ。」といひかけて、

みづから旨いことを言ひあてたと思つたか、錆びた  
聲ながら調子高に笑つた。

「はゝゝゝはゝゝゝ。」

女中頭はむきになつて、

「何んなにか、まあ、嘘お面白うございませう。」

「七才の龍女が、はゝゝゝゝゝゝ、」と笑つて、一向  
頓着しない。

「え、大きな聲を出して何でござりますね。」

「心配には及ばぬよ、若武者熱心だが、あれは宗  
旨が違ふ。堅法華ぢやで手に合はぬわ、殊に私なぞ  
が何としてだ、奥方ぢやあないが、彼女も其針の毛  
裘の部に屬する。」

「そしての、あれで思ひ込むだ男があるよ。猶更以て若武者の手に組伏せられるものではないわ

さ。

「へい。」

「其がの、隻眼の職人ぢやからおもしろからう。

さつきもいつた、それ奥方と乳兄弟の讚平といふ男さ、お乳の人が姫様について東京へ行ったあとへ残つて、六慶といふ彫刻師の内弟子になつた。七才の龍女は師匠の女で、まづお主筋さの。處で一座下つて手をつくといふ挨拶で居るから、談話はまだ達かぬさうで、女はじれ切つて居るといふことぢや。いや、談は別ぢやが、女が讚平を慕つて居るといふことを知つて居る故か、妙なことがあつた、といふのは、いまぢや。若武者今夕、お祭に踊つた姿のまゝで、あの女を連込んだと思はつせえ。藤色の紋着で男帯を締めた後姿といふものが、ちやうど其頃、讚平が姫様のお對手に參つて居つた時の姿にそっくりで、まるで一むかし前の夢を、月夜の幻に見るやうに思つたよ。」とあとは殆ど獨言のやうにいつた

が、氣をかへて、

「ちやうど汝が鶯を鳴かした時分ぢやの。」と悦に入つてまた笑つた。婆さんは何か思ふ處あつたので、折角の秀句もあまり氣も留めず、あらたまつて、

「もし、其の譜平といふのが隻眼でござりますとね。」

「むゝ、何うした、左横さ。」

「はてな、何にしましても、今夜お心が解けて御前様のお室へ入らつしやることになりましたから可いやうなものでござりますが、奥様は、フトすると其人を思つていらつしやるかも知れませぬが、何うでござりますね。」

「いや、何とも申されぬ。尤も其の片眼失したのも姫様のお手にかゝつたわけだな。ある時、見るな／＼とおつしやつて何か石盤へ落書をしておいでなさつたのを、主従ながら幼い同志ぢや、心安立てに譜平がうしろからそつと覗いた。あれ、とおつしやつて氣がついて振り向かつしやると、手にもつてござつた石筆のさきで譜平の眼球を突漬して、蒼く成つてお了ひなすつたといふ。石盤には、（可愛い

／＼と書いてあつたさうな。其つきり顔を見よ  
うとおつしやらぬので、讚平は不具者になつて別れ  
たぢやが、手短なこと、其の可愛い、とあつた上  
へなり、下へなり、讚の字を一字書き添へることに  
さへすれば何でもない戀ぢや。汝心あたりでもある  
か。

しばらく黙つて考へたが、

「しかし滅多なことはいふものではござりません。

まあ／＼、何にしました處で、其針の毛裘の上へ、

まだ外に思召があれば一層のことお折れ遊ばすでは

なかつたに。串戯はよして、まつたくは、あなた

御存じの通り、今まであれだけに、出來ますだけの

ことを皆様でなされても、膝の上へお取上げもござ

りませなんだのが、一寸申上げる言のゆきがかりで、

（殿様をそれほどに嫌ひ遊ばして、仇敵のやう

に思召すなら、お身體を放れてお引籠り遊ばしてい

らつしやるのは、貴女が御卑怯でござりませう。）

と申上げると、お顔の色が變はつて、（直ぐに

傍へ行つて、可いから一緒に寝て見せよう、さきへ

行つて申して置け。）と、斯ういふことになつた

のでござりますがね。」

忍海上人はそれを聞くと深く傾いたが、しばらくして頷いた。手を一ツ拍つて、

「なるほど其處だ、御卑怯。――か、いかさまな。いや、しかし恐しい婦人だ。」としみ／＼といつて、また傾いた。上人は露を置いた衣の袖をあちこち撫でて、

「まづ參つて御機嫌をうかゞはう、それは棄て置かれぬ。」と口の裡で呟いた。一大事といふ顔色をしたけれど、婆は氣が着かず、何か此方も思はくのあるやうすで、

「それぢやあ彼處へ行かつしやりますか、五年越の思召がかなふのでござりますものを、活如來様だつて、何だつて、何のやうなお心持でござりませう。何うぞお顔色を、私も拝みたいものでござりますね。」と落膽した形で首を垂れながらくど／＼といつたが、額越にフト見ると、忍海上人はハヤあつちむきになつて歩行いて居た。見ると堪らなく、身もだえした時、下唇とゞもに其の頤の眞中の有名な黒子が震へて、

「あゝ、あゝ、」 となさけなく、聞えよがしの  
欺息ためいきをする。と引戻ひきもとされるやうに忍海にんかいは、腰こしを据すゑ  
て蹈留ふみとまつたが、半身はんしんを捻向ねぢむいた、片頬かたほは月の隈くまで  
暗くらい。片頬かたほに笑えんで、

「これ、あとでわしが顔かほを見みせよう、おなじこと  
だわ。」

「そつとして、直ぐ母様のお部屋ぢやから、  
と引寄せて脇の下に手を取りながら、新發意は廊  
下の眞暗な中を奥深く忍んで入った。位牌堂の後あ  
たりで、女は歩行馴れないので高足を使ひ、一段高  
くなる處を踏みはづして、ばつたりといふ音を立て  
る。

「叱！」

「危いのねえ。」

「そつとするの、そつとするの。」と蟲のやう  
な呼吸で囁き合つたが、寂として長い廊下を小蟹の  
つたひ行く氣勢がした。

むかうた曲角の、蔀の板に灯がさして、天井が黒  
く見えたと思ふと、正面へ雪洞が出て、うしろに人  
の立姿。横ざまに影を映して、する／＼と一文字に  
歩行いて来る。

「や、母様、」と思はず呟いた新發意の聲を聞

くと同時に、はたと兩膝をついて紋着の袖を重ねた上へ、眞俯何に顔をあてゝ、身體の遣場のない新發意が、壁に附着いて立つ足許に、みだれ茶筌のひれ伏した女は、――これが舊藩主の姫君で、常願寺のお裏様で、恐らく較べものゝない御客色だといふ、お小さい時は、垣越に庭の中で見たものもあるが、い東京へお上になつて後、御婚禮の時五挺揃つて駕籠があとさきの腕車に圍まれて常願寺の門へ入つた、其の二番目のが其だともいひ、また何ういふわけか、宵の内に推返した拝見の群集は騒ぎ損、小袖の色も伺ひ得ず、散つてしまつてひつそりした、大路を横ぎつて町端から矢を射るやうに曳き込む一人乗の車に母衣もかけないで乗つて居た、夜會結の白襟が其だともいふ、風説ばかり。其後五年越、いかなる大旦那の隠居でも拝むだことのない、聞えた夫人がこれかと思つた。――咄嗟に、畏敬と、恐怖に打たれて、倒れるばかりに坐つたのである。

で、はじめて灯のあかりで判然となつた主殿之助を、雪洞で透かして偶然御覽じた夫人は、いま女中頭が噂をして居た如く、五位の閨に行かうとする途

中であるが、片隅かたすみに小さくちひなつた、くらがりの新發しんぱ意ちには目めもかけないで、立つて女むすめの姿すがたを見みながら、身動みうごきもしないで居あた。

新發意しんぱちは行くゆにも行ゆかれず、引返ひきかへされず、逃にげもならず、頸うなじのあたりを掌てのひらでおさへながら、もぢ／＼して、

「えゝ、えゝ、」とばかりで、一足ひとあしあらずさりをする。

これには心こころも着つかない状さまで、夫人ふじんは傍目わきめもふらなかつた。

新發意しんぱちはもちあつかひ、

「はい、何どうぞ、はい。」

夫人ふじんは知らぬ顔かほで、下したなる男姿をとこすがたを見詰みつめて居ある。

「はい。」と此度このたびは些ちと大きく、新發意しんぱちは聞きえる

やうにいつて、また調子てうしはづれにいつた。

「はい。」

夫人ふじんの眼めは射いるが如ごとくに、屹きと暗くらがりの中なかの新發しんぱ

意のつむりに注いで眉が動いた。ひやりとしたやうに窘みながら、また、

「はい、」  
といつて、にやりと崩れたやうな笑顔を見せる。

「讚平かと思つたよ。」  
と夫人は新發意を一目見たまゝ、眦を主殿之助にかへした時、うは言のやうにいつた。

これを三位かと間違へたので、

「はい。」

「まあ、」  
と夢から覺めて斷念めたやうに言ひ棄てにして、夫人はすれ違つて通り抜ける。

「はい、はい。」とまた新發意は首を窘めて、ひよこ／＼とお辭儀をしたが、屈むと突然主殿之助を搔抱いて引起し、殆むど無意識に立つて顔も上げずに凭れかゝるのを、前の方へ押出しぎま搦むで二人は行かうとする。夫人は今すれ違つたまゝつか／＼と通つたが、二人が歩行き出した時、フトまた立停まつて、うしろ向のまゝ其の頭を肩につけて振向いた。

「待ちな、待ちな。」

「はい、はい。」と新發意は眼をくる／＼とやつて、おど／＼する。

「其の紋着は誰の、お前のか。」とおうやうに落着いて聲をかけた。

「私」といひかけて、新發意はきよと／＼自分の胸を見て、また女の肩のあたりを見た。

「お前のかい。」と、この度はものやさしい。女は顔を蔽うて居た手を膝の上に下ろしたが、俯

向いて居て顔も上げぬ。ものはこれに聞かれたことが確であるから、附添つた新發意は機嫌を損ねまいとあたふた氣を揉む。

「あれ、誰のだツて、え、お前のか、お前のか。」  
と口せはしい。

「わかりませんか。」  
と低聲でいつて、夫人は一步引返した。

「さ、おいひよ、おいひよ、これ、お聞きなされるから。」

「あの、借りました。」と主殿之助は呼吸の下でやう／＼答へる。小聲を鋭く聞取つて、ツと雪洞を駑した時、力を籠めて、

「誰の。」

「誰のだツて、はやく。」

「あの、讚さんといひます人の、小兒の時のでございます。」

「可し、可し。」とまた落着いた調子で頷いた、母親の様子は、大目に見許した如くであるから、新發意は急いで主殿之助を捻向かせて、うしろから突いて、おされ行く女と蝶の纏れるやうに竝むで、早

足で遠ざかつて廊下の曲角でさやかに見えたが、八  
ヤあかりも届かない。夫人は見送り果て、其まゝ  
釘着にされた如く、板の上にすつくと立つて、身動  
きもしないで居る。巨刹の奥深く、鼠も騒がず、薨  
の外に風も聞えない。かゝる時は、亡者が寺人のし  
らせとして、鉦を打ち、また本堂の扉を搔縁る音を  
立てることのある他には、もの音はしないのである。

じり／＼と炎さきが伸びてひらめいた。蟬のいえ  
込むトタンに、髪も動かなくつた夫人の瞳が動いて、  
顔の色が蒼ざめたが、倅が仄かに白く暗がりの中に  
残つて、而して灯は消えた。

「奥様。」

手燭を下に置き、板敷に手を支へた腰元の園とい  
ふのは、思ひがけず、こゝに夫人を見出したのであ  
る。

縞のフランネルの単衣を着て、結目に櫛をさした  
ばかり、引つめた洗髪、ヤケに投やつた姿のまゝ兩  
手を懐にして爪先を揃へ、身をはすかひに薨に凭れ

て、深々と頤を襟に埋めて居らるゝ、足許に火の消えた雪洞が柄を上の方に向けて仰向けに倒れて居た。

うろ／＼と見上げながら、

「夫人、何う遊ばしたのでございます、お迎に参りました。あちらで御前様がお待兼で、」と恐々いふ聲の下に、夫人は影の消える如く、凭れた部からツト離れざま、

「園か、あゝ悪いものを見た。」とばかりで、ずん／＼居室の方に引返さるゝ。

「馬鹿、馬鹿、これ、馬鹿な真似を！」

背後から掴まへられて、作藏は樹に懸けた切に縋つて居た手に一層力を入れたので、まだ乾かない洗濯物を絞つて雫が垂々と落ちた。月の上にはばかり黒い雲が掛つて、樹の間にはまだ星が冴えて居る。縊死を留めたのは女中頭の婆さんで、鱧掴にした三尺帯を、また一つぐいと手元へしやくつて、

「放しなよ、これさ、これさ、何の真似だ。」

と忙しく強く叱るやうにいつてまた引張る。前のめりにあせり切つて、

「放してくれせえ、なむあみだぶ／＼。」と念

佛ばかりは落着いたものである。

「其のお念佛の聲がしたらこそ助かつたやうなもの、眞個に、私が變だと思つて聞着けなけりや、今頃はお前、賽の河原で船賃にまごつく處だ。佛様は未だお迎へなさらぬに、まあ、其の厭な手附を止しなといつたら、何の真似だ。これ、馬鹿、薄氣味が悪いねえ。」

「眞似ぢやねえだ、眞個だ、眞似ぢやねえ。」

「あら、馬鹿、またあんなことをいふよ。え、酷い力だ、あれさ、これ串戯ぢやない。」

「放してくれせえよ、放さねえか、放さねえか。」

浮足になりながら取纏つて、

「畜生、阿呆め、頓馬だねえ。これ、放すもんか、

よしなといふに。」

「え、取着いて、放さぬなら、道伴にすべいか、やい。」

「可い加減にして巫山戯ないか、おい、一旦掴まへたものをいくら古風だつて見殺になるもんかよ。

作藏、何かお前眞剣らしいから可笑いよ。お前にはの、分るまいがの、無法矢たらと首を縊めりや、何が何だか分がわからなくつて、犬死といふんだよ。

猫が死んで芥溜へ棄てられるのと同じだ。お前、口惜いぢやないか、さ、分をいひな、よくの。分が解つたら止めやしない。そして死んだあとを、私がい、

やうにしてやらうから、何うしたのだ、お前のことだから何も色戀の沙汰ぢやあなからうし、借金をはたられるといふでもなからう、撮み食をして申譯が

立たぬとでもいふことか、さあ、聞かせな、可いから聞かせなよ。」といつて、丸太の上から引下した時は、作藏が拳は弛むで居たので、手が放れてベツたりと下に坐つた。

「へい。」

「へいぢやあないよ、お前といふものは詰らなさ過ぎるもんだ。何も、わけも絲瓜もあるのぢやあ無からう、お前なんざ、何も濟まぬの、立たぬのツてこたあゝりやしないやね。大方このあひだお寺の門の門に繩を釣つて、縊死の眞似をするといつて、眞個に落ちた小僧の乞食があつた、忍海様が、（こりや可い、こりや人ごとにやあ出来ない眞似だ。）といつて笑はしツたら、お前えらさうに、（俺にだとして出来やす）といつて、又笑はれた。それを覚えて居て、あの眞似をする氣だらう、馬鹿ぢやあないか、ねえ、ほんとにこりや馬鹿の眞似だから、馬鹿な眞似だ。」と兩袖を引張つて二幅の前垂の塵を拂ひ、衣紋を撫でて見て濟ましたもの。作藏は膝をついた、おつたて尻、よつぽど本氣だと見えて大呼吸をついて居たが、其反つた唇を空に出

た。くもがくれの月で、窪むだ小さな眼も、低い鼻も、兀けた頭も、ばうとして瓜の皮を剥いたやう。

「聞いてくれせえ、眞個のことです。」

「何がさ。」

「眞個のことですよ。」

「聞くよ、むゝ、可し、可し、可し、何うしたと？ 此

のあひ手ぢやあ張合がないねえ。」

「かういふわけがす。」

「さういやあ、馬鹿の眞似を、馬鹿な眞似は可か

つたね。」と女中頭は獨りで繰返して、思はず笑

つた。

作藏は眞顔で泣出しさうな容子で、

「何これ、乞食の眞似といはれると口惜うがす。

何だちゆうて、冷飯食うても生きて居てえ、娑婆を棄てますべい。義理人情で、はい、立つにも坐るにも仕方ないなくなつたからでがさあ。」

「義理人情、其は珍らしい、作藏、何うしたといふんだい。」

「はい、他のこつちやあごぜえしない、お前様も忘れめえ。去年お米様がお部屋で首い釣つて死なつしやつたア何の爲でがすよ。お前様。」といつて、眼を二つて女中頭の顔を見た。意氣込が尋常ならなから、思はず釣込まれて眞面目になつた。

「むゝ、さればさね。」

「はい、何のためだ、皆あのお新發意様の爲ぢや。

えゝ、これ、」

「左様さ、あゝやつて、まあ身分の悪い、賤いお腹からお産なすつた若様が、いまの奥様にお兒はな

し、またお兒の出来るわけもなし、他に跡取もおありなさらぬから、旨くゆけばこの寺のお住持に坐られる御身體なんだものを、何ういふわけか、女狂をおはじめなすつて、いくら御意見を申してもお肯入れなさらぬといふので、お米様が苦に病んだものさね。まあ、死んで影身に添つて、お心を入れかへたいと言つたやうなわけだらう。」

「其でがす、違えねえのでがすよ。はい、俺あこんなしがねえもので、えゝ、耳を撮まれたり、唇を捻られたりで居るでがすよ。はい、おもしろくもねえでがすよ、親あ分らず、優しい姉一人持たねえで、ねつ／＼と食つて生きて居るばかりだ、つばも引かけてくれる人あねえ。あのお米様ばかりだア、作藏々々つていたはつてくれさした。」

俺あ彼の人の聲を聞かねえぢやあ片時も居られねえで、毎晩縁の下へ潜つて、お米様のお部屋の下へ寝たでがす。冷えて凍えるやうな夜さりぢや、生れてからはじめてゞがさ、腹あ痛むで呻吟いたら、お來様あ出て來さつせえて、呼出して、連れ込むで、

柔かい、厚い、はい、ぬくとい夜具の中へ入れて一所に寝かしてくれさした。幽霊のやうな、蒼白え顔をして翌朝庭前から送出して下して、直其あとで首を釣つて、おツ死したでがす。何かあの一念ぢや、お新發意様ア魂が入れ變つて、堅くならつしやつたと俺あ疑ひましねえ。皆で、あゝぢや、かうぢやちゆツて、悪口のういふけれど、何眞個なことがあるべい。お新發意様あ堅くなつてしまはしたと思ひましたに、はれ、情ねえ。さつき裏の非常口で大變な處を見つけたでがすね。」

作藏が眼は涙を含むで居た。

「夢ぢやあねえ、捻つて見ても夢ぢやあねえでがす。何たるこんだ、情ねえ。あれまでに氣を揉んで、命まで棄てさつせえた、お米様の前に對しても、俺あ口惜しくツて、何とすることも出来ねえだ。法然頭アぶちのめすでもねえ。お執事様もござらつしやるに、俺が出しやばつて意見のうすべいやうはなし、今頃は何むな心持のしてござらつしやるか、冥途のお米様あ、俺、可愛ゆうてなんねえで、はい、めち

やくちやに押死ぬべい。死んでお目にかゝりや、ど  
んなお顔色だか見られるでがせう。やたらに縋りつ  
いて眼を塞いだら何うかなることぢや。括効のねえ  
娑婆に居るよりか増でがすからね。俺あもう何ちう  
ても留まらねえだよ。何も寒いかともいつてくれた  
事のねえお前様、こんな時留めるにやあたらねえ  
だ。  
」

さらけだした、ありたけに、女中頭は些不意打を  
くらつてまごつき、

「其は、それはまあ、おや／＼其はまあ。」

「何うした。」

「はい、」

「いや、私ぢや、私ぢや。」 仰いで見た作藏と、  
振向く女中頭の眞中へ、ゆつたり幅廣う薄白い姿で  
立つたのは、さきに袖垣で別れた執事の忍海である。

「おや、あなた。」 と婆さんは莞爾々々する。

作藏は手をついて、きよと／＼眼で、

「はい、はい。」

「何か、感心ぢやの、作藏、残らず聞いたよ。」

「まあ、あなた、馬鹿々々しいではござりません  
か。わけは分らずこけの一念、恐いもので、既で  
にほんものになりかけたのでござりますよ。まあ、  
ほ／＼。」 と陽氣に笑ひ出出した。

「まづ、串戯ではないよ。」

と上人は案外笑ふ者をたしなめて、

「全く人の實ぢやよ。こけぢや、たはけぢやなぞ  
と申すけれど、伶俐なものに出来ようか。汝の志、

あまり難有さに、私も貰涙を溢した。あゝ、誰も祭  
してをる、お米の心は何んなであらう、新發意殿は  
亂脈ぢや。したがな、年少なあのおとなしいものに  
些少も罪はないよ、皆女めがする仕業ぢや。美しく  
見えても彼は鬼ぢや、魔ぢやての、新發意の體に分  
入つて臍腑を嚙る奴ぢや。七さいの龍女さ、なあ、  
婆さん。」

「へい。」といつて分らず、いふやうに答へて頓  
興な顔で居る。

「法華から其の御門徒を亡ぼさうといつて遣はし  
た間謀で、まづお世つぎの新發意殿を吸殺さうとい  
ふ恐しいことだ。」

なか／＼分別のある惡黨は此方にもこたへがある  
で、さきからも手出しが出来ぬわ。新發意殿は一向  
な若様、何も御存じない、よいお兒ぢや。少しも惡  
氣のないものには、魔がさし易いで、梅のさきから  
體に分入るとしてある。おとなしいものをいぢめる  
で、猶憎いわ、なう作藏。」

「はい、」といったきり拳を握つて、作藏は頭を垂れて染々聞いて居た。上人は下唇をなめて、  
「處でぢやが、まあ、作藏かうぢや、よく聞きな。小兒が病に苦むのを可哀うて見て居られぬというて、遁げ出す親があつてならうか。其の苦むのがたまらぬというて、親が首を釣つて何になる、何うするよ。病なら何處までも治してやらねばなるまい。」

また金魚を取りに来る鼬が居たら、飼うて置く者が水の中へ入つて身を投げてなるものか。其鼬を殺さずに我身が死んだのは、お米殿心得違ひぢやて、何にもならぬわ。腹を立てるなよ、作藏。汝それほどに思ふけれど、犬死ぢやつたよ。それ、矢張新發意はあの通りで、鼬めに狙はれてござるでないか。分別のあるものは、何もむづかしい事はない、其獸を打殺すぢや。あひ手の惡蟲さへ取つて退ければ、おこりが落ちると同一で、お新發意の身持は治るて。惡魔が又、那見えても女に化けたゞけの通力ぢや、棒でくらはせば些少めかたのある鼬より脆いよ、なあ、作藏分つたらう。」

身を震はして、

「ありがたうござります、」と云つてべつたり地に額をつけた。

「もし、」と女中頭も安からぬ眼で、作藏の様子と、忍海の顔とを見較べながら、沈むだ調子でいつた。

「ぐんづらものゝ事出来し、恐うございますよ、ほんとうにあの女を。」

「いや、お姿、黙つて居らう。」

「だつてもう奥様がお折れ遊ばした上は、

何もあなた。」と擦寄つて低聲でいふと、忍梅は、一面にくもつて来た空を見ながら、

「此の陽氣ではまだ何うして、なか／＼針の毛裘を脱がぬからよ。」

「あなたほんとうに肯いて下さいますか。」と  
 主殿之助は、新發意の居室なる唐机に片脇凭れて、  
 籠洋燈の灯影に顔の色美しく、細い襟脚白々と、藤  
 紫の紋着艶やかに、友染の綿の厚い大きな座蒲團の  
 上に据ゑられながら、斜めに見た。

新發意は其の傍なる瓶掛の傍に、片足折曲げて、  
 居坐行儀悪く、片膝を立てながら、これは直に疊の  
 上、鐵瓶のつるに手をかけて、火箸で切炭を突きな  
 がら、  
 「肯くさ、何でもいつて御覽。此中でどれでも一  
 ツ、皆大事なのぢやから、どれも、これもというて  
 はいかんよ。」といひかけて、ふツふと鐵瓶の下  
 を吹く。

横にいる／＼なものが並むで居る、桐の箱に眞田  
 紐十文字にかけたものあり、袱紗に包むだものあり、  
 臺に乗せた小さな木像もあるし、きら／＼と光る玉  
 もある。水晶で刻むだ可愛らしい鼠も居る。うつく

しく竝べたあたりは、何となく床しい薫がする。

「皆、寶物なの、これね、これね、それからね、これ。可いだらう。これはね、殿様から拝領した陣羽織の切だとき。蜀江の錦といふの。これは、あの、いまにお前のと二個、煙草入を拵へるつもりなのだから、いまねだりツこなしさ。どれでも欲しいものをさうおいひ。一ツだけなら何でも可いや、この鼠は何うだい。」

女はつまさぐつてた筆を其まゝ頬にあてゝ傾いた。

「いゝえ。」

「ぢやあこれにおし、立派で可い。」と袱紗を開いて、片端をあけると、見事な珊瑚の八分珠、女は顔を差出して、

「まあ、可いんですねえ。」といったが、机にかけてる片手を出して取らうともしなかつた。新發意は小指のさきで、珊瑚の上をはじいて見て、

「可いぢやあないか、これが可いよ、女には一番用に立つて可いよ。」

「でも、私やそんなもの欲くはないもの。」と

むきなほ  
向直つて、机の上つくゑに一枚開いた白紙まいひらに臨はくしむだ。

「おや、綺麗な卦算きれいな けさんだこと。」

新發意しんぼちは瓶掛越びんかけこしに、鐵瓶てつびんの上うへへ顔かほを出だして、

「そりや可いい、そりや、黄金象嵌きんざうがんがしてあるさ、それを上あげようか。」

「いゝえ。」といつて筆ふでをかへし、軸ちくで紙かみの上うへを二ツ三ツ叩たいて居ゐる。

新發意しんぼちの拍子ひやうしめ抜けした顔かほは、瓶掛びんかけの下したへ下おりて、火ひを覗のぞいた。

「ぢやあ分わからないや、何なんにも欲ほしくはないんぢやないか。」

「いゝえ、あるの、欲ほしいものがあるの。」と甘あまえるやうにいつて、びつたり机つくゑの上うへに片頬かたほをあてた。「それぢやよしな。さうおいひといふのに、をかしな人ひとぢやあないか。」

「だつて下くださらないと、私わたしはいひ出だしてから口惜くやしいものを。」

「なんののかのとむづかしくいふなら止よすさ。」  
「だつてあなた、約束やくそくをしたぢやあゝりませんか。」

奥様おくさまに廊下らうかで出でつくはした時ときは、殺ころされるかと思おもひ  
ましたよ。」

「私わたしだつて吃驚びっくりしたけれど、何なに、何なんにも母様おつかさんはお  
構かまひでないから可いいや。」

「それだツたつて、」

「ぢやから、誰だれもやらぬとは言いやせぬといふに。」

「其それでは、いひませうか。」

「むゝ、」といつた新發意しんぱちは、かやうに重おもんじ  
ていひ出すものゝ、いかに貴重きちようなるかを豫あらかじめ思おもひ料はか

つて、易やすからず危あやぶむ色いろである。

主殿之助は居坐を直した。

「あなた、お寺に、あのね、」

「むゝ。」

「あの、御山の瀧の上へ蓮如様の十五五丈ある大きな銅像を立てるんだつて、其の見本に、六慶といふ彫刻師に一昨年おあつらへなすつて出来た、お腹籠の一寸五分の御像があるでせう。」と言正しくきつぱりといふ。新發意は女のあらたまつた、凜とした眼をうつかり瞻つて、

「あるさ、」

「さう、」

「あるが何うしたの。」

「あれを下さいましな。」

「何、あれをくれ、あれかい、あれは、些困つたなあ。」

「だつて黄金でも、銀でもないぢやありませんか。そして何も下さいたつて貰切にしますのぢやないの。此間ツから幾度も私の母様が其事をねえ、お寺へお願に出ましたから、お聞き遊ばしたでせうと

思ひますが。」

「何かい、夢を見たつて、」

「あの、私の父上はねえ、お亡なんなさる時、こんな商賣をさして濟まないツて、紫の袈裟をかけた、うつくしい坊さんにおんなすつて、夢枕に立つておわびをなすつた位ですもの。魂が生きて在らつしやるに違ひないんです。さうしてあのお像は大層心配をしておこしらへなすつたんですから、念が籠つて居ますんですわ。」

ですから、このあひだ母様が夢を見たの、あなた聞いたでせう。」

「あゝ、あのお像の左の眼が傷んだつて、」

「それで、直してくれとさういつて見えなくおんなすつたんですツさ。他に頼む人はないのですけれど、大事なお弟子で、菊地讚平ツて、よく、あの父上の手を飲込むで居るのがありますから、治させようと思つて、母様がわけをいつて、幾度か知らお寺にお願いに参つたさうですけれど、お執事さんは、あの（其はこしらへたものは職人、六慶が製したものにせい、一旦お寺の寶藏へをさまつた上は、俗のものゝ手に觸れることは置き、近く寄つていきを

かけるさへ恐れ多い、勿體ない、そんなたやすいものではない。見る、内のお上人様にだとして、奥様にだとして、人毎にお眼通が叶ふものか。）とおつしやつて、何んなに申しても肯いちやあ下さいませんツて、狂氣のやうに騒いでをりますの。私はあなたに御鼻肩になりますから、他におたより申す處はございませぬ、ちやうど幸でお願ひ申すのでございませぬからねえ、あなた、それほどの物を、損じさすの、失くするのツてことは、怪我にもないだらうぢやあございませぬか。大方母様は私の返事を今夜は寝ないで待つてませうから、後生ですから、しばらくそつと貸して下さいませぬ。あなた、とずつと寄つて軽く膝に手をかけたが、其まゝツト退いてまた机に凭つた。これほどの新發意が、それには困じ果ては形で手を拱いて、黙つてしよげて、いまも乗つてると思ふ女の手が、フト見ると膝の上に失くなつたので、怒らしたか南無三と、あわてゝ眼をあげて見ると、うつむいて何か筆を染めて考へて居た。

「おい、」

「……」  
「黙つて居る。」

「ちよいと。」

「可よござんすよ、もう、あなたは。」とツンとして向むかうむきになった。うしろへにじり寄よつてソツと覗のぞくと、むかし其ま樓がしろうの全盛ぜんせいを極きはめたおいらんで、いま其その廓くわくのお針はりをして居ゐる、お家流いへりうの上手じゆうずなのに、いろはを書かいて貰もらつて、間まも、隙すきも、手習てならひをしようと、いふ、袖そではすなほに紙かみの上うへへ、

かなへてくださいまし 二二二 と平假名ひらがなで書かいた。

主殿之助は居坐を直した。

「あなた、お寺に、あのね、」

「むゝ。」

「あの、御山の瀧の上へ蓮如様の十五五丈ある大きな銅像を立てるんだつて、其の見本に、六慶といふ彫刻師に一昨年おあつらへなすつて出来た、お腹籠の一寸五分の御像があるでせう。」と言正しくきつぱりといふ。新發意は女のあらたまつた、凜とした眼をうつかり瞻つて、

「あるさ、」

「さう、」

「あるが何うしたの。」

「あれを下さいましな。」

「何、あれをくれ、あれかい、あれは、些困つたなあ。」

「だつて黄金でも、銀でもないぢやありませんか。そして何も下さいたつて貰切にしますのぢやないの。此間ツから幾度も私の母様が其事をねえ、お寺へお願に出ましたから、お聞き遊ばしたでせうと

思ひますが。」

「何かい、夢を見たつて、」

「あの、私の父上はねえ、お亡なんなさる時、こんな商賣をさして濟まないツて、紫の袈裟をかけた、うつくしい坊さんにおんなすつて、夢枕に立つておわびをなすつた位ですもの。魂が生きて在らつしやるに違ひないんです。さうしてあのお像は大層心配をしておこしらへなすつたんですから、念が籠つて居ますんですわ。」

ですから、このあひだ母様が夢を見たの、あなた聞いたでせう。」

「あゝ、あのお像の左の眼が傷んだつて、」

「それで、直してくれとさういつて見えなくおんなすつたんですツさ。他に頼む人はないのですけれど、大事なお弟子で、菊地讚平ツて、よく、あの父上の手を飲込むで居るのがありますから、治させようと思つて、母様がわけをいつて、幾度か知らお寺にお願いに参つたさうですけれど、お執事さんは、あの（其はこしらへたものは職人、六慶が製したものにせい、一旦お寺の寶藏へをさまつた上は、俗のものゝ手に觸れることは置き、近く寄つていきを

かけるさへ恐れ多い、勿體ない、そんなたやすいものではない。見る、内のお上人様にだとして、奥様にだとして、人毎にお眼通が叶ふものか。）とおつしやつて、何んなに申しても肯いちやあ下さいませんツて、狂氣のやうに騒いでをりますの。私はあなたに御鼻肩になりますから、他におたより申す處はございませぬ、ちやうど幸でお願ひ申すのでございませぬからねえ、あなた、それほどの物を、損じさすの、失くするのツてことは、怪我にもないだらうぢやあございませぬか。大方母様は私の返事を今夜は寝ないで待つてませうから、後生ですから、しばらくそつと貸して下さいませぬ。あなた、とずつと寄つて軽く膝に手をかけたが、其まゝツト退いてまた机に凭つた。これほどの新發意が、それには困じ果ては形で手を拱いて、黙つてしよげて、いまも乗つてると思ふ女の手が、フト見ると膝の上に失くなつたので、怒らしたか南無三と、あわてゝ眼をあげて見ると、うつむいて何か筆を染めて考へて居た。

「おい、」

「……」  
「黙つて居る。」

「ちよいと。」

「可よござんすよ、もう、あなたは。」とツンとして向むかうむきになった。うしろへにじり寄よつてソツと覗のぞくと、むかし其ま樓がしろうの全盛ぜんせいを極きはめたおいらんで、いま其その廓くわくのお針はりをして居ゐる、お家流いへりうの上手じゆうずなのに、いろはを書かいて貰もらつて、間まも、隙すきも、手習てならひをしようと、いふ、袖そではすなほに紙かみの上うへへ、

かなへてくださいまし 二二二 と平假名ひらがなで書かいた。

「まだ可いよ、可いぢやあないか。折角の頼みぢやから、御像を貸したやうなものゝ、お前其れを取ると直ぐ歸るといふのは、餘り薄情ぢや、もう些少遊ぶでおいでよ。」

「はい。」

「ねえ。」

「だつて明るくなりませんと、歸られませんもの。お寺の前は疾くから人通が大變です。」

「裏から出るさ、裏からゆうべ入つたやうに。」

と新發意は熱心にいつて摺寄つた。袖は受身になつて持ち扱つて、

「夜が明けましてから、あの田畝の川を、一人で爪立つて歩行けますか。」

新發意は生眞面目なもので、

「渉られるさ、足許が確で可いや。」

「まあ、考へて御覽なさいな。あなたさうした日にやあ、宛然、三の坂の狐につまゝれたやうぢやありませんか。」

と女は莞爾餘儀なさうに笑つて見せた。

「あゝ、さうか、はゝゝゝ、」 と何の力も無いやうに、ぐツたり瓶掛の前に胡坐かきながら眼を上げて見ると、幽に東雲のあかりがさして、障子は薄くをかした狐色になつて居た。覗くやうにすると、敷設けてある夜具の、黒い天鷲絨の襟にも白々とほこりがかゝつて、籠洋燈の灯も黄味を帯びて、ぼんやり竝べ立てた寶物も、すべて欠伸をしさうな形。灰も、炭も皆すべて色が褪せた座はぼやけて居る。

「かうなると直ぐですから、ね、歸りますよ、よ。」 と膝を立ててさうにして女は急ぎ立つ。新發意は懐からものを抜かれた風で、

「ぢやあ、歸るさ。」

「はい。」

「餘り現金だねえ、歸るといふと直ぐさう喜ぶのだもの、嫌だ、歸しやしない。」 立ちかけた女の前へ横ずりにずつて奇つた。新發意は膝に手をついてきつと極つた。他愛のない顔をぢつと見て、

「それぢやあ歸りません。可いやうになさいましな。」 とツンとした趣でキチンと坐り直つたが、少しひぞつて横を向いた。片頬にうつくしく鬢の毛

がもつれて影が映る。心淋しい、樂まない姿を見て、新發意は大にしよげ、

「歸すよ、お歸りよ。だがねえ、」

新發意はあたりを見て、鼠色になつてぼんやり立つ屏風の一所に眼を留めて、

「あれは何だい、さあ、いつて御覽、え、いつて御覽よ、あれを知らないぢやあ歸さないからいゝ。」

と尋ねたのは、屏風の畫で、薄墨の浮上つたやうな羽色、白い腹、五六羽重なりあつた稻雀。厚い三角形の嘴に、一ツづつ黄色を帯びたのが籠洋燈のあかりで見えた。

「あれですか、」 といつた時、女はやさしい顔をした。新發意は嬉しさうに、

「あゝ、何だよ。」

「あれはね、あの、．．．．．」

と横を向いて、紙の薄い、障子の方を見返つたが、急に傾いて新發意の肩に頬をあてゝ、

「いま鳴きました、」 とあどけなく嬉しさうにいつた顔は、細面で、ばツちりとした目を少し細め、壓を見せたが得もいはれずあでやかなものである。

「お歸り。」

「はい、」といふをきつかけに、ツと立つて離れ  
たやうに新發意と分れて出る。

上から、

「御像は氣をつけるんだよ。」

下から、

「生命がけですものを、」と上を向いた、あざ  
やかな一雙の眉は、暗い階子段の途中で見えなくな  
った。

むすめ 女の姿が、二枚の障子を一枚あけた臺所の前にあ  
 らはれた時、眞赤に焚火が映つて黒ずんで判然見え  
 る、と竈の前に蹲むで、一人片手で頤を支へて眠さ  
 うな、片手で耳のあたりに鐵火箸の長いを持つて  
 居る、眼尻の垂れた大な顔に、べにのやうになつて  
 炎が映つて、どつしりした大釜の下でちよろ／＼と  
 煽つて居た。

はツとためらつたが通らねばならず、あけてある  
 障子の透間の、暗い所へ斜に半身を出した、片足眞  
 赤な障子の前になる、トタンに振向きもせず、其頤  
 を支へたまゝ、其鐵火箸をもつたまゝ、くちのさき  
 をむぐ／＼とやつて、  
 「通ちゃん、お精が出ますね。」と萬事心得て  
 聲をかけた、これは忍海のとりまきで能く見しつて  
 居る納所である。

「はい、」といつて顔を背けたが、汗びつしよ  
 り。女はちよいと立停つたが其まゝ焚火の蔭から、

矢<sup>や</sup>がそれたやうにフイと消<sup>き</sup>える。

「奥様、もし奥様。」

ちやうど細目にあけた襖の合目から横顔を纒に見せて、長い廊下を見送つた夫人は、女が藤紫の紋着の袖の端の、一ゆり揺れたのを、焚火の蔭から見失つて、ホツと呼吸をついた時、呼ばれたので其の眦を返した。

敷居の外に手をついたのは、女中頭の婆である。

おうやうに黙つて瞰下すと、眼をあげて婆は額越に色をうかどひ、

「奥様、御前様がお召でござります、あなた夜があけましてもおいで遊ばしませぬと、御卑怯でござりますよ。」といつた。さし置いた雪洞は光を失つて居る。

いふうちにハヤ手のさきが襖にかゝつたが、聞き果てるや否や、逆にすらりとあけて、フランネルの寝衣、巻つけ帯、ありのまゝなる夫人の姿は、右の

爪さきから悠然として廊下へ出た。

吃驚、きよとついたやうに身を起して、雪洞を上げた婆は、二三歩後すさりになつたが、前途を開いて片側からさきに立つと、ためらはないで静々といて行かる。

うしろから早足で、いま居間の中から生れたやうに出て来た、色のあざやかな着附の腰元は、する／＼と追ひ縋つて、うしろからずつしりと羽織らせた。梅の三紋の判然した黒縮緬の羽織に柔かに手を通し、片袖を落した手を懐にして、左の白魚のやうな指のさきで引合はせた襟をおさへながら、屹として前に進む。

「此方へ、」といつて見返つた時、婆は表二階の段階子に、二三段階踏みかけて居た。

夫人は段階子の附際で、半身を捻ぢた、すらりとした櫛卷の、襟の深い後姿で、斜めに二階を透かしたが、やゝあつて活潑に白い足を踏みかけると、う

つむいて少しよろめくやうに、瑩音を立てゝ上つた。

襖を左右にあけて導く。後からついて来た腰元は、こちらむいてあとを閉めて向直ると、ハヤ一室向うの、別の襖が遙かに開いて、夫人のすつと入つて行くうしろを見た。

あとをまた閉める、さきをまた開ける、三室過ぎて次の襖の際で、婆は膝を折つて、手をついて、心して静かに開けた時、薫が高い香の匂、ばつと面を打つたので、夫人は立停まつたが、片手を懐にしたなりで立ちながら、キットすかして見る、下なる疊が波に引かれて、おのづから歩くともなしに動くやう、夫人は一文字にすら／＼と通つて、さし控へて居た腰元が膝でにじり出て、はらりと友染の座蒲團を直した上へ、夫人は、見向きもせず乗つて、すつと立つたが、半身恰も沈むで行く如くに見えて、しとやかに座についた。

眼のさきに碁盤を控へた白は御前で、黒は忍海上人である。二人ともどつと盤面を望むで、いま坐つ

た夫人には眼もかけない。

盤の上には、入亂れた黒白の石が斷續して、一夜に湧いた島のやうに竝むで居る。夜通し圍むで居るのであらう、曇を帯びて玉ぼやの臺らんぷがいまだについたまゝ。夫人は坐ると齊しく黒白いづれにも目をくれず、眞中の盤の中心に瞳を注いで、しばらく眉も動かさなかつたが、わき目もふらないで其まゝ、

「火鉢をおくれな、寒いから、」と無造作にしっかりとつかりいつた。

やゝあつて腰元が夫人の傍に火桶を据ゑた時、黒石の忍海上人は膝に構へて居た手を逆に疊について、仰向いた鼻で此方を見た眼は、夫人の天窓を越して、差控へて居る、三人の女中に注ぎ、

「皆お次へ。」と言つてまた盤面を睨む。

聲に應じて、女どもは皆あとあきに、這つて隣室へ遠慮する。

「劫ぢやな、はゝゝゝ、」と御前はさびた聲で鷹揚にいつたが、すぐ黙つて座はまた森とした。

夫人はしつとりと垂れかゝる羽織の袖を、手あぶりの縁にかけた手に力が入つて、思はずしかと押へながら、正しく坐して片手を胸に置いたまゝ、眼まじろぎもしないで、黒と白との真中を見詰めて居たが、

「明るくなつた、」と呟くと其まゝ、何と思はれたか、ずつと立つて居處を替へ、忍海の背から暮

盤ばんの向むかうへ出でて、くるりと背うしろ後む向むくと窓まどの障しやうじ子を颯さつと開ひらいて、あけがたの境けい内だいに面おもてを向むけると、朝あさ風かぜが冷つめたくやゝつむりにこたへるやうに重おもく入はいつて、一あぶき煽きを與くれて灯ひを消けした、玉たまぼやは白しろくなつた。

「おゝ、せい／＼する。」と夫人ふじんは俯うつむ向むいて外そとを視ながめる。小窓こまどは外そとからは眼めにつかない、通とほりからは見みえないやうに隠かくして拵こしらへた二階かいなのである。

榎えのきの梢しすきにならびたつた、いかめしい表門おもてもんは、濡色ぬれいろを帯おびてまだ閉しまつたまゝで、およそ二百坪つぼに餘あまる境けい内だい一面めん、薄うすりと苔こけを被かつて青あむで居ゐる。眞直まっすくに流ながれて弓形ゆみなりに一筋すぢ、斜なめに鐘樓しやうろうへ一筋すぢ、敷石しきいしが敷しいてある。其傍そなたはたをしら／＼あけに唯ただ一人ひとり、廣ひろい處ところをのそ／＼と歩行あいて居ゐる、尻端折しりはしまりの男おとこは作藏さくざうである。

作藏さくざうは、腕組うでぐみをしてうつむいた袖そでの下したに、握太にぎじやうな棒ぼうをかくして、一心しんに地ちを見みながら、指さす方かたもなく歩あを運はこぶ。ちやうど爪つまさきを放はなれた處ところを、石いしが動うごくやうにのそ／＼と行ゆくのは、一匹びきの墓ひかで。門もんの方ほうを指さして殆ほとんど規きり律つた正たしくといつてもいゝ、一てい定ていの距きよ離り

を一ツ一ツ這うて進むのを、傍目も觸らず視詰めながら、墓が一步出れば、親仁も一步、足をあげて蹈むでもなく、立停まつて遣過すでもなく、境内を斜かひに、敷石を横ぎつて、凡そ人のあるくのに最も緩慢な足の運びで、やゝしばらくついて行く。

門際にも到らず引返して、墓はまた横の方鐘楼の方へ動き出した。

同時に向をかへて親仁はまたあとについたが、組んだ腕を解かうともせず、隠した棒のさきを出さうともしない。式の如き愚直ものゝ、大方墓は一種の通力を持つて居て、うかと人手にはかゝらぬものである事を固く信じ、一擧手にして僵し得べく眼には見て取らるゝほど、實際容易なものではないと、自から重むじて居るのであらう。

かはらず何處までも墓の行く方へ少し離れてついて来る。ハヤ明け放れたほどであるから、爪さきを這ふ墓は捉ふべき影もない。蟲の天窓と直角に、反つた唇を突出して、のつぺりとした顔に、眼も鼻も

ない異形いぎやうな親仁おやぢのちひさ小な身からだ體は、次第しだい々々いゝゝに位置ゐを轉てん  
じて、松まつが一ほん二本くすのき、樟きの樹きが四ほん本つで包なんだ中なかから堆うづたか  
い瓦屋根かはらやねのあらはるゝ、朱塗しゆぬりの柵さくをまはした高たかくな  
い鐘樓しゆりゆうの蔭かげへ、いつのまにか入はつて見みえなくなつた  
時とき、二棟ふたむねに分わかれた本堂ほんだうと、くりやとの間あひだ、こゝにも  
敷石しきいしの通とほつて居ゐる細ほそい路地ろぢの間あひだから、袂たもとを胸むねにかき  
あはせた薄紫うすむらさきの紋着もんつき、細ほそりとした小造こづくりな姿すがたで、これ  
も頭かぶを垂たれながら急足いそぎあしに出でて、一重薄葉ひとへはくえふにつゝまれ  
た雛ひなの如ごとく、霽もやのむらゝと立たつなかへ、濡ぬれたや  
うになつて出でたのは、王殿とのものすけ之助のすけに扮ふんした女むすめである。

急に廣場へ出てあかるくなつたのを、女は驚いて  
 フツとさめたやうに目を閉じた。鐘樓の暗いあたり、  
 屋根瓦の庇の間、其處ともなく中空に數知れず、一  
 團、一團、雀の聲。遙かに聞えて所々に鳴残る蛙の  
 鳴音は、恰も大軍が山手を指して引上ぐるやうであ  
 る。

女は何か心着いて、つか／＼と本堂の前へ行つて、  
 チヨイと片手拝をしたが、心忙しさうに急いで敷石  
 を眞直に傳はつた。

此の敷石を挟んで、左に七本、右に六本、いづれ  
 も老樹の櫻が植わつて居る。一葉も枯れず繁り合つ  
 た半あたりで姿がかくれたトタンに、一巡り巡つて  
 鐘樓の此方から作藏がのそりと出た。が、さきとお  
 なじやうな足取で、何かものおもひをしてる風、の  
 そ／＼門の方へ境内を斜に過つて行くと、女は櫻の  
 中から出て、うしろへ小戻をして、葉越にむかうを  
 透かして見た。

作藏が身體は扉に竝むで立停まつたが、門をあけようとはしないで、やゝあるとまた引返して、女の居る方へ例のあるきぶりて寄つて来る。

近づいた時、目をそらして女はあらぬ方を見ながら、櫻の根をくゞつて、作藏をはづして地の上へ出たが、極めて落着いて、澄ました風情。しきり鳴く雀の聲の、鐘樓の空の方をながめてゐむ。

傍をあるいて作藏はまるで見ないやうな様で、敷石の上を本堂の方へ、女のうしろを通り過ぎた。と思ふと、フト突戻されたやうにくるりと身を翻して、横ざまにじり／＼と進み寄るので、一緒に推放された如く女はあるき出して、また門の方へ行かうとする。

背後へ少し急につか／＼と寄つて近づいたから、女は遣過ごさうとも思つたか、其まゝ立停まつた。作藏も同時にあるき止むだが、また思ひ出したやうに傍を通つて、離れて前へ出た時、振返つてはじめて女を見て、目を合はした。

式の如き醜怪な顔の色も、知らず何かものゝ易からぬ趣で、一際凄く思はれる、女は再び面を背けた。

作藏は足踏をして横ざまに左へあるき出した、女はそれて右へ横ざまに又動いた。作藏は縦になつて女のあとをつけようとすると、女は向をかへた。かやうにすることあまたゝびで、果がない。門の戸はあけないから出るにも出られず、内へ引返す分ではないので、女は心づかひに疲れた状で、しばらく葉櫻のかげに立煩うて動かなくなる。

右に出で、左にまはり、ずつとうしろにもなり、前にまはりもして、作藏はつかず、また放れず、しかも何等か狙ふ的のあるかのやう、じりゝ／＼と歩を運ぶ。

狙はれるのは我身であることを察するに難からぬ的に立つて、女はといきをつき、といきをつき、胸を轟かしつゝ、次第に呼吸忙しく、引詰められ、おつかぶせられるやうになつて立窘む。

周圍をまはつて直に、斜に、あるくに角を立て、  
取廻した、恰も眞中へ、獲物を措いて、この境内一  
杯に蜘蛛の巣をあやつるやうである。

女はそれともなくおのづから手足を縮めて、いき  
つきあへず固くなる。

五歩、六歩、一間、五尺、一步の間近へ、土蜘蛛  
は巣を手繰り、巣を手繰り、ねらひ寄る、このあみ  
の届かぬ外の、忍窓の二階の眞下を暮は心なく這ひ  
めぐつた。

思はず、ト胸をついて、しかと肱をついた。夫人は、二階で驚破と見らるゝトタンに、悲鳴を擧げて、「あれ、」といった。女の身は弓形にそつて、重ねた細い襟を驚掴にされたが、目をうつとりとけざまに反つて白い踵を揃へた。身體は土を離れると、悶えて、釣り下げられながら裳で地を摺つて、斜めにずる／＼と引摺られた、背が横ざまにあたつて、松の梢がゆら／＼としたが、其まゝ鐘樓の蔭になつた。風一陣、葉櫻の梢は皆ざら／＼と震ふと同時に、

「あツ、」と聞えた裂いたやうな苦痛の聲、染色が風に散つたやうに、紫の着物はひら／＼と亂れ／＼て矢のやうに駈け出したが、しめつた苔に踏つて、膝を揃へると眞直にのび、うつむけにはたと僵れたが、やがて刎ね上るやうに起きた。咄嗟の間に、またばつたりと僵れる時、七株植つた櫻の木の、眞先に一本、三尺ばかりでまはり太で、くの字形の、おなじ樹の切株があるのに両手を縋り、しつかりと胸に抱へ占めて、片頬を埋むばかりひつたりと切口

へおしあてゝ、がツくり仰向いた髪は、流るゝやうに颯と解け、肩に餘つてはつさりと地に落ちた。

女は眼を瞑つて可愛い口を眞四角に小さくあけた、得堪へないやうに唇を弛めたが、見る／＼薄りと蒼味を帯びる額際へ、横に前髪の亂れた中に、にじんで、紅の見えたのは、口紅が散つた色ではない。其膝、其手、其胸に搦むでもれた長襦袢の色の、それでもない。

「あ、」 とばかり腕を落して立たうとした、項を無手とうしろから押へられ、心激して、力を籠めて振向いたはずみに、鬢にさした櫛がばたりと落ちる。きつと瞳を据ゑて見合したのは、嫁いで五年、生れて二十三年、かほど近々と面を合せたのは今がはじめての良人の佛造つた顔である。

夫人は蒼くなつて、言急に、

「あなた！」 と一聲、たゞこれだけを言った。

御前は、でツぶりとした頬を、ゆた／＼と片頬笑して、

「奥、もそつと能く見、能く見るのぢや。」  
といひながら、冷たくなつた頬に手をかけそへて、  
残酷にも下なる女に突向けた。ともすれば亂れかゝ  
る膝を合して、紫の下に紅の襦袢のちら／＼とわな／  
く斷末魔の衣の皺は、波打つやうにきら／＼として  
見えた。

「可い加減になされい、あまり強情をお張りなさ  
ると、未始終いゝことはござらぬぢや。讚平などと  
いふ餓鬼を慕ふ女はあのみまで寂滅でござるから  
な。」と獨言のやうにいひながら、忍海はのびあ  
がつて一寸見て、ざくりと碁笥の石を掴むだ。

ちやうど此時棒を提げて、さまでは急ぎもしな  
いで、鐘樓から作藏は出て來たが、のさ／＼と近づ  
いて、其の醜怪な顔を上から正おもてに向けると、  
女はうつゝのやうに細い手を上げて、五の指を動か  
したが、苦とまた叫ぶと同時に刎起きて、一間ばかり  
投げ打たれるやうになつて駈けたが、地を枕に、此  
度は横僵れになつた。袖も裾も力なくだらりと垂れ  
た、紫の色は一水入つた如く、褪せながら鮮明にな

つて、あをす青澄むだおほぞら大空の處々、ちぎれ／＼にたましいろ卵色の雲  
がで出た。境内けいだいは。パツとあかるくなつて、瞳ひとみの据すわつ  
た夫人ふじんの眦まなじりに血ちがさした。

「何時だ、いま何時だ。」と夜具への襟深々と口許まで引被ぎ、櫛巻のつむりを枕に埋めたまゝで、夫人はおとなしい聲して、附の女どもに尋ねられた。

一昨日の朝、尋常ならぬ顔色で、表二階から速急に居室に引返されると、其時いまだ昨夜のまゝ上げないで敷いてあつた閨の中に、僵れるやうに突伏された、其ツ切、次の日の次の、いま晩方まで一言も口をきかなかつたので。仔細を知らぬ女どもはあつけに取られた。其の日は常願寺に意外な出来事があつた。二月ばかり前に首を縊る眞似をして、小兒の乞食が表門の門に繩をわがねて下つたが、日數も經たず境内の葉櫻の下で、紫の紋着を着た若殿扮装の鯉屋の袖が殺された。下手人は鐘樓守の作藏で、悪怯れた色なく檢べの役人の前に出て、（俺、金魚を捕りに失黽を撲殺したでがす。）とばかり、大方氣が違つたものであらうといふ沙汰。尤もこれは其場から擧げられた。其日からの引籠。何をいつても返事をなさらず、薬は勿論、一箸もものを食べ

ない。病人は二人出来て、お新發意も蒼くなつて震へて居るが、それもこれも夫人の不快と何ういふ關係があるか一二の人を除いてはこゝに在るもの誰も知らず。たゞ枕頭に附添つて、交代の夜通し看病、何處が悩むとも仰せられず、熱い寒いともあるのでないから、手のつけやうもなく、皆顔を見合はせて居るばかりだつた。既に此時まで、切齒一ツ音を立てられなかつたのであるから、いまかく時間を尋ねられた時、皆呼吸をのんで居るので、齒ぎしりの氣勢も知れるばかり、残らず聲は聞いたけれど、其とて餘り案外なので、僻耳だらうと思つて誰も答へない。

「何時だ。」と再び極めて沈むだ調子でいつた。女どもは耳を立てたが、なほ黙つて居る。

「何時だ。」

それでも應じなかつたので、強く、言尻をあげて、  
「何時だ。」

「はい、あの、何ぞめしあがりませんか、奥様、皆御心配申して居ります。そしてお薬もおめしなさ

りませんとと、お悪うございませう。實に皆が行届  
きませんで、何ぞお氣に障りましたことがございま  
すなら、何様にもお詫を申します。御氣分が宜く  
おなり遊ばしてから、また何うなりと思召をお通し  
なさいまして、お鹽梅のお悪い時はお平になさりま  
せんと、お身體にさはりますから、何うぞ何事も御  
堪忍なさいまして、御用をおつしやつて下さいま  
し。」「と年ごろなのが口を切つて、二日ばかり謹  
むで、自由にもいはず、いひたい／＼と胸に  
ためて、腹を膨らまして居たのを、こゝぞと眞先に  
吐出したのだから堪らない。

「何時だ、」と三たび静かにいはれたのを、耳  
にもかけないで一膝出て、

「眞個でございますよ、何が何でも奥様、お湯一  
口召上りませんでは、お大切なお身體が一體何うな  
りますものでございます。此方等づねなら、づか  
／＼無理にでも、お脈を診るのでございますけれど  
も、これがあなた様、うつかりお傍へも寄られませ  
ん御身分でございますから、何ういたして宜いやら、  
皆が夜の目も寝ませずに、わく／＼氣ばかり揉むで

居をりますのでございますよ。何どうぞ何事なにごとも、まあ、  
御了簡遊ごれうけんあそばして、願ねがひでございませうから、御養ごやうじ  
生遊やうあそばして下くださいまし。え、奥様おくさま、ねえ皆様みなさん。

「はい、何どうぞ奥様おくさま。」

夫人ふじんはものもいはず、心こころばかり動うごいて少すこしく横よこに  
なつた。

「何時なんじだね。」

「お園さんなんざ、眞個でございますよ。奥様が何だつて何ういたさうと申して泣いてますぢやあございませんか、何もあの娘ばかりぢやあございませんけれど、ねえ。」

「左様でございますともね、お薬もお嫌、めしあがりますものも、おきむづかしうございますから、せめて何處を何うせいとか、あゝせいとか、おつしやりつけて下さいまし。」

「皆が途方にくれますものを。」

「何時だと聞くのに、」と夫人はたいゆうに落着いてまたいはれたから、皆がはつと氣がついたが、調子も變らず、何事もない様子。いつもかういふとちつたことのある時は、直に御癪癖だけれど、珍らしいと思つて、それから問はれた時刻をいはうとして、柱時計を見返る瞬間、ぶつけるやうにつむりが動いたと見る時、お顔が上つて手をのばし、枕頭なる手文繩の上にあつた、金側の女時計を引手繰つて取ると其まゝ、蒲團に身を埋めて、ふツくりとした夜具の襟から、手が出たと思ふと、無雙の黄金蓋が

齒に鳴つて蓋があいたから、残らずしらせ返つて片唾をのむだ。

「只いま蓋のあいた方は、數字の方ではなくつて裏の方、器械が見え透いて、小さなぜんまいが音もしないでづつしりとのびちゞみして見えた。其をまたゞきもしないで見詰めて居たが、

「えゝゝ、」と飛つくやうに口をつけて、硝子に前齒をあてた。バリノゝといふ音がして、破れた黄金時計は閃くが如く光つて夫人の手から放れ、蒲團の端にかゝつてしばらく留まつたが、重たさうにこつて、疊の上へ落ちてづつしりとして留まつた。これには音もなかつたけれど、女どもは飛上るやうに驚いて、片膝立てたのがあり、手を上げたのがあり、口をあけたのがあり、黙つて俯向いたのがあり、ひつそりしながら周章てたのである。居ずまひをも直さぬ内に、

「園、」と呼むだ、この聲が落着いた、おとなしいものであつたので、あとをきづかつた一同ひしと胸に應へ、

「はい、」とためらはず返事をしたが、召され

たお氣入は蓋しこゝに居るではない。

「園か、」

「はい、」 といつた當人は殊の外うるたへて、

あたふたして、そゝツかしく、

「それ、お園さん。」

「はい、」 といひながら、一人は飛上るやうに

立つて出た。

「園。」

「唯今、」 といつて、また一人駈けて行く。

「園や、」

「只今、只今參ります。」

「園や。」

「はい、あれ。」

「居ないのか。」

「はい、」 とあとしざりになつて爪立足、一人

残された奴のみじめさといつたらない。

「園や、」

「唯今、あの何をして、あれ、おや、」

「園、」

「お園さん、」と泣聲になつて、立つたり、居たりきよろ／＼眼であたりを見まはしたが、誰も居ないから一人さし置いて出るにも出られず、手足を窘めて、首をのばして、待つても急に來ないので、堪らなくなつてきよと／＼出る、部屋の口で迎に行つた眞先の女とぱつたり逢ふ。

此方は掴みつくやうな権幕で、

「困るぢやあないか、何うしたつてんだね、晚いよ、お前、何うしたのさ。」とがみ／＼食ひつくやうに、しかし憚つて、ひつそりと極低聲。

園そのといふのは舊もと此地このちの生うまれで、姫ひい様さまと同年おなじし幼をい時ときからお傍そばに居ある、優やさしい、綺きれ麗いな女をんなである。

七八歳ななやっさいの頃ころ、姫ひい様さまいまだ乳う母はに齊かし負つかれて此この寺てらに養やしはれて居あたほどのこと、正月しやうげつ腰わこし元もとづれで門もんの内うちに追お羽ひ子こをした時とき、よぼ／＼の爺ぢいの屑くず屋やが一人ひとり、ものゝ見み境さかひもなく入はいつて來きて、追お羽ひ子この群むれを横よこ切ぎらうとして心こころなくよろめいた。此こ妨まじのため、今いまあひてから渡わたされて、宙ちゆうで受う取けとらうとした、姫ひめの手てを支さへて、羽は子こが外はれたので、いきなり持もつて居あた三人にんだち立たの羽は子こ板いたの柄えで、爺ぢいの弱よわ腰こしを一ひとあて當あてたから堪たまらない、浮う足あしになつて向むかうへ怪けし飛とんだ爺ぢいは、名な代だいの因いん業ごふもので、腹はらが立たてば火ひをつける、火ひをつけると、口くち癖くせのやうにいふ、近きん所じよでも忌い憚はつた執し念ふ深んぶいのであつたから、得えもいはれない眼まな光ざしで姫ひめの面おもてを脱にらむで、其そのまゝよぼ／＼と出でて行いつた。あとで姫ひい様さまは太いたく我わが儘まを後ご悔くわい遊あそばし、乳う母はと相あ乗のりで貧びん乏ぱふ横ち町やう裏うらの三げん軒め目の爺ぢいが住す居まへ行いつて手てをついてお詫わをなすつた。ぢいやといつて頭くわを下さげられた時ときは、あぶら汗あせを流ながし

て難<sup>ありがた</sup>有<sup>さ</sup>さが身に染<sup>しみ</sup>みたので、泣<sup>な</sup>いて嬉<sup>うれ</sup>しがり、世<sup>よ</sup>を怨<sup>うら</sup>み身を果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なんだ心を和<sup>な</sup>げられて、望<sup>のぞ</sup>をとあるにまかせ、一人<sup>ひとり</sup>の女<sup>むすめ</sup>を頼<sup>たの</sup>み参<sup>ま</sup>らせたのがこの園<sup>その</sup>で。それから片<sup>かた</sup>時<sup>とき</sup>も傍<sup>そば</sup>を離<sup>はな</sup>し給<sup>たま</sup>はず、園<sup>その</sup>もまたよく姫<sup>ひめ</sup>の心をのみこんで齊<sup>かしつ</sup>負<sup>く</sup>ので、表<sup>おもて</sup>向<sup>む</sup>きは、主<sup>しゅじゅう</sup>従<sup>じゅう</sup>恰<sup>あ</sup>もまつたくの姉<sup>あねい</sup>妹<sup>いも</sup>のやう。東京<sup>とうきゅう</sup>にも一<sup>し</sup>緒<sup>じゆ</sup>に行<sup>い</sup>つて、また此<sup>この</sup>寺<sup>てら</sup>に從<sup>したが</sup>うて來<sup>き</sup>た。いつか風<sup>かぜ</sup>邪<sup>じや</sup>の心<sup>こゝち</sup>地<sup>ち</sup>で、園<sup>その</sup>が室<sup>へや</sup>を隔<sup>へた</sup>て、寐<sup>ね</sup>たことがあるが、夜<sup>よ</sup>中<sup>なか</sup>に淋<sup>さび</sup>しいといつて、夫<sup>ふ</sup>人<sup>じん</sup>は一<sup>ひと</sup>人<sup>ひとり</sup>一<sup>いつ</sup>緒<sup>じゆ</sup>に寐<sup>ね</sup>に行<sup>ゆ</sup>かれた。ちやうど其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>、病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>だといふものをつかまへて、何<sup>なん</sup>かこだはつて居<sup>ゐ</sup>たものがあるつて、聲<sup>こゑ</sup>も立<sup>た</sup>て得<sup>え</sup>ないで寤<sup>す</sup>められた園<sup>その</sup>が、困<sup>こ</sup>じ果<sup>は</sup>てた折<sup>をり</sup>だつたから、夫<sup>ふ</sup>人<sup>じん</sup>は何<sup>なに</sup>者<sup>もの</sup>とも見<sup>み</sup>定<sup>さだ</sup>めなく、手<sup>て</sup>にした雪<sup>ぼん</sup>洞<sup>ぼり</sup>でハタと坊<sup>ぼう</sup>主<sup>しゆ</sup>あたまの赤<sup>あか</sup>いのを打<sup>うち</sup>ひしいだ。トタンに灯<sup>ひ</sup>が消<sup>き</sup>えてあやめも分<sup>わか</sup>らず、打<sup>うち</sup>懲<sup>ちやう</sup>された好<sup>す</sup>色<sup>しき</sup>漢<sup>なん</sup>は其<sup>その</sup>まゝ消<sup>き</sup>えうた。が、山<sup>やま</sup>猫<sup>ねこ</sup>の化<sup>ば</sup>けたのでも何<sup>なん</sup>でもなかつた。(園<sup>その</sup>うるさいわね) といつて抱<sup>だ</sup>かれて寐<sup>ねん</sup>をなすつた、それほどの睦<sup>むつ</sup>さ。

「それがねお前<sup>まへ</sup>様<sup>さん</sup>不可<sup>い</sup>ないんです。お園<sup>その</sup>さんはいま此<sup>この</sup>方<sup>かた</sup>へ來<sup>こ</sup>られやしませんよ。間<sup>ま</sup>の悪<sup>わる</sup>い時<sup>とき</sup>は悪<sup>わる</sup>いもんだね、お前<sup>まへ</sup>様<sup>さん</sup>、そら、此<sup>この</sup>間<sup>ま</sup>作<sup>さく</sup>藏<sup>ざう</sup>に殺<sup>ころ</sup>された藝<sup>げ</sup>妓<sup>いしや</sup>の

懐中にあつたといふ、騒の、あのお像ね。あれが  
前、取つて片着けたあとで、また失なつたといつて、  
表ぢやあ騒いだのを知つてるだらう。それがお前、  
大それた彼のうつくしい顔をしたお園むが盗だんだ  
つてね。いえ、何でも怪いことがあつたのか、ばれ  
かゝつてお前、いま、忍梅さんと取締の婆さんとで  
取占めてる最中ぢやあないか。お召も何もあつたも  
んどぢやあないやね。私が行つた時あお前さん、片手  
を折れるほど捻上げられて、ひい／＼泣いてた處ぢ  
やないか。これから縛るんだ、打つんだツていふ騒  
ぎ。何此女生爪をはがすより裸にする方が恥かしが  
りだからきゝめがある、なんて大變だね。もう、打  
たれたらうよ、あれお聞きな、それ泣いてるだらう。  
酷い目に合はすさうだ。」とひそめき告げて、眉  
を擧めた處へ、二番手、三番手が引續いて取つて返  
す。

「何うしたい、何うしたよ。」

「上へ着てるのを剥がれたさ。」

「大變だ、びし／＼やつてるよ。」と切ない顔

色をしながら部屋の口に落合つた。

「園、園や。」

「あれ、あれだもの、お前、私一人残つて何んなに弱つたか知れやしない。むかうでも放すまいが、長いものにや巻かれるだ、奥様が恐いやね、かうしちやあ居られない、私が行くから頼むよ。」といひすてゝ、残つてみじめを見たのが堪らない風で駈け出すと、さそはれて後に續き、裳を煽つて三人がこみあひしながら、われもわれもとばた／＼ばた、入亂れに跽音が廊下をへだたる。

「奥様、姫様。」と枕許に寄つて、取亂した髪を握りあへず、やうくしばらくの猶豫を與へられて来た園は、窺れたもの淋しい笑顔を、夜具の襟から差覗いて優しく夫人に差向ける。

引添うて入つて来た女中頭は、無手と傍に坐つて眼も放たぬ。

「園か、」と眼を睨いて夫人は、幾度も呼ぼしたのを心にも留めない状で、  
 「少し脱がせておくれ、重いから、」といつて、白い手を纒かに見せて、上へ衾の襟を上げるやうにする。

「よろしうございますか、お寒氣はいたしませんか。」といひ、片膝ずらして、園は横合から夜具に手をかけて、後へソツと引いた。

「もうちつと、」といつた夫人の、しつかりかきあはせた雪のやうな衣紋が出た。

「姫様、お鹽梅は、」と心易ういつた園は、お顔を見て情ない顔をした。

「園、」

「はい、」と頷くやうに返事をして、園は氣輕く装うたのである。

「瘡だらうと思ふよ。」といひかけて、夫人はいきをついた。

「急に寒氣がするし、そしていまはもう熱くツて熱くツて仕やうがないから、」とそれでも。パツチり眼をあいて、きれいな、頬の筋一つ動かさない、我慢強い意氣は面に溢れた。

「左様かも分りません。」

「むゝ、屹度さうだよ、面倒臭いな。」

「お鬱陶しく在らつしやいませう。」

「あゝ、落してしまはうよ。あの、母様に頂いて来たお守刀がある、あれを出してくれないか。」

「はい、」といつたが、いぶかしげに夫人の顔を瞻つた。

「姫様。」

「可いんだよ、おまじなひを知つてるから。」  
おとなしい落ついたものゝおつしやりやう。しば  
らくして、

「畏りました。」と心得た答をして園は座を立  
つた。女中頭は眼をくる／＼とやつて、易からぬ色  
を顯はして控へたが、箆笥の鑲がカタ／＼といった  
時、堪らず聲をかけて、

「これ！」

園は聞かない振をして、恭しく錦の袋を取り出すと、  
片手に柄を捧げて念ずるが如く伏拝む。

「これ、お園さん、これ。」

引出がまたカタリと入つた。園は引返して来て、  
また枕に寄る。

「これさ、これ、」と少しあら／＼しくいつた。

返事もしないで差出すと、寝たまゝ八重に格うた

紐ひもをくる／＼と手た繰くる、總ふさが垂たれて、蒲團ふとんにかゝつて、口くちが弛ゆるむだ、眞白まつしろに白鞞しろさやの柄えが見みえる。

「これ、お前まへ、これ！」と口くちせはしくにじり寄よるのを、輕かるくおさへて、

「いゝえ、私わたしがおつき申まをして居をりますから宜よろうございます。」と澄すましていひ放はなしたが、九寸五分すんぶの細長ほそながい眞珠しんじゆに青味あをみを帯おびた重おもいのが、水みづが垂たりさうで、夫人ふじんの顔かほに映えいじた時ときは、園そのも顔かほの色いろを動うごかした。

夫人ふじんは右め手に握にぎり持もつて、しばらく目め前さきに横よこへたが、左ひだりの手てをあげて、今夜いまやぐ具ぐを落おとさしめてあらはにした、ふつくりとした白襟しろえりの合目あはせめへさし入いれて、ぐいとあけた、のどから胸むねの恰あたかも玉たまをのべたやう、雪ゆきに曇くもりがかゝつたやうに左右さいうにはらりと開ひらいたと思おもふと、横よこにして、刃やいばの腹はらをひや／＼とおのが胸むねにおしあてた。

「姫様ひいさま、」と思おもはず打うちわな／＼いて手てに絶すがる、園そのの掌たなそこを胸むねにあてさしたまゝ、夫人ふじんは自若じじやくとして、キ

ツと天井を見上げた。

天井てんじやうに小さな節穴ふしあなが一箇つあつて、其その節穴ふしあなに目めが  
 一つ嵌はまつて居ゐるのを、凡夫等ほんぶどもは心着こころづくまい。

これは東門とうもんにかけて敵てきを見るが如ごとき悟さとの開ひらけない  
 ものではない、佛ぶつと稱とへて二十二相さうの一ひとに數かずへら  
 るゝほどのものである。

此この田舎ゐなかに於おいて出いづる駕籠かご、坐すわれば脇息けふそく、立たてば幾千いく  
 の衆生しゆじやうの頭かうべが其足許そのあしもとに九拜はいする。位くらゐは從五位じゆゐ、一ひと度たび  
 駕籠かごを動うごかせば、辻つじも、小路こうぢも、屋根やねの上うへも、橋はしの  
 下したも、蟻ありの塔たふの如ごとき人ひとだかり。珠數じゆずをかけて念ねんずる  
 やら、手てを合あはせて拜をがむやら、嬉うれしがつて泣なくやら、  
 難有ありがたがつて唸うめくやら、此この御方おかたの眼脂めやにも、唾つばも、耳みみの  
 垢あかも、甘露かんろより黄金わうこんより煎藥せんやくよりも尊たふとまるゝ、活佛いきぼく  
 様さま、と申上まをしあぐるものは、妙めうなことをなさるもので。

天井てんじやうに節穴ふしあなをこしらへ、御自分ごじぶんのおつれあひの閨ねやを  
 隙ひまありといふと人知ひとしれず根氣こんきよく覗のぞいてござる。む  
 かし禰次郎やじろ兵衛べゑは後架こうかの節穴ふしあなからこれをしたが、い  
 まの常願寺じやうくわんじの御前ごぜんの僧正そうじやうは、何なんのことはない、二階かい  
 から目藥めくすりだ。ソレこれが、柔和にうわ忍辱にんじよく大慈願だいひくわんの御心みこころを

持つて、衆生を御覽ずる目であるから、凡慮の斗るべき處のものではない、いつも好樂をしたらうけれど、……此時は驚いた。

耳が赤くなつて上氣をして居させられた閨の内の、うつくしい胸のあたりへ守刀をあてたので、恰も眼球の中へ刀尖を突通された如くに感じて、御前は眼が眩んで背に冷汗を流した。モ一の眼は鼻と口と眉と額と額の皺と、一緒にびつたり疊の上にくつついて居るのであるから、ものゝ用には立たなかつた。

御前はハヤもう眼も見えず、手を伸ばしても届かぬわけなり、勿論聲を立てるべき數でない。歩行かうにも生憎大佛づくりでふとつちよの重いと來て居るから、ぶツしりとやつては、おや、蹻音の大な鼠だよ位で、人の了簡をするづうたいではない。で、恰も象變じて從五位になつた形で、釘づけにされたやう、手足のあがきもならないで、悶々ながら覗いて居る。

「園、」と靜かにいつて、夫人はおさへ留めた

手を放さうとしたけれど、園はしつかりと継りついて、

「姫様、何を遊ばします、」といった、おろ／＼聲。女中頭は寄るにも寄られず、汗を握つてまじ／＼とする。

切尖を返して、ひらりとまた乳のあたりへおしあてた、更に持直してまた喉のあたりを撫でた、劍の刃は、十文字に、夫人の寂寞たる胸の上に閃めいた。

「ひや／＼としていいよ、可心持だ。もつとこんなにしたら何んなに可からうねえ。」また取直しさうにしたが、園が蒼くなつておど／＼する、危み恐るゝ顔を見て莞爾して、

「まぢなひだよ、お前、何が恐いのさ、もういい、もう可いよ。」といつて、枕に片手をついて半ば身を起すと、一緒に襟を搔合はせ、搔合はせて、搔合はせた上を、づつとしごいた。

「あゝ、せい／＼した、可い心持になつた、癩なぞといふものは氣もないものなの、もう、あたりへ

だつて寄りつきやしないから。」と、さつきのまゝ  
手にして居た守刀をソと頂いたが、ホツと呼吸をつ  
いて手を放した。まだ動悸の納まらない、園を見返  
つて、

「お前、其のさやを持つて一緒にいて来ておく  
れ、」といつて、二日湯水を通さなかつた身體を、  
しやんとして裳を引いてすツと立つた。弱々とした、  
なよやかな状も、爪さきからつむりの上まで、撓ま  
ぬ一筋の矢を貫いた凜然たる趣がある。

「奥様、まあ、どちらへ行かつしやります。」  
 と婆さんは詰るが如くに聞いた。これには眼もかけず、返事もしないで、もの問ひたげに案じ煩ふ園の方を見返つて、  
 「汗がついたらう、刀を汚したから庭へ行つて、あの清水で洗はうよ。」  
 といつて片袖に包みながら、切尖をじつと御覽じた。

其清水は土地に誰知らぬ者もない、弓の清水と稱へて、いにしへ木曾の冠者義仲が八幡を念じて水を求め、弓杖で突刺した石の裂目から銀の様な清水が噴出した。石は豎五尺ばかり、周囲が二尺ばかりある黒く滑かに艶かなので、恰も鐵を磨いた烏帽子の如き形である。其少しく窪むだ上の口から滾々としつてほとばしり出る水勢、八百年のいまに一滴も乾はせぬ。恰も夕月が大きく空近い處に懸つた。滴る翠の葉越の影に、石は漆黒に露を帯びて、颯々と落ちて、薄暗い地に脈々と溢れ流るゝ水の枝は、皆堆うして、潔く白く且つ透通る。水の口の素く練つた一

巾の絹に、腰を屈めて劍の切尖を貫いた時、水は七筋に分れて焼刀にからむだ。雫を切つて拂ひ、園が差出した鞘を取つた夫人は、心靜かにこれを納めて、晴々しい顔色で空を眺めた。月の前を縫つて、櫛の樹の小枝から、榎の幹へ、銀のやうな針線を引いて、拇のさきばかりの黒い塊が、さら／＼と傳うたが、引返して、さ／＼蟹の足が月あかりに動いて見え、斜めに中途から折れて、また舊の枝に絲を繰つて傳うて上がる。ちやうど清水の上を、月の下を、行き戻りして園を營むで居るのである。

「園、」と呼むで、伸上るやうにして上に指をさした。血が上つたか、庭下駄ゆるく引かけた足許がよろ／＼して、前へ僵れさうになつた。

「お危うございます。」と飛ついて肩を貸した、園の脊に手をついて、夫人は力なげに氣をゆるした姿で立つたが、見返ると樹立を透かして、づらりと簾がか／＼つて居る。縁側は一樣に、はてしなく細く長く斜めに續く。上なる二階の窓から、頼杖ついて、顔を出して、此方を見て居るのは確に御前。夫人は

ぢつと見た、身はまた意地が通つて、まつすぐに立つて凜とした。

「奥様つめたい風があたりますから、お床へ入らつしやいましな。」と殆むど頬を合はせるやうに竝むで居る顔を振向けた。

「いゝえ、それよりもね、園、」と夫人は瞳を轉じて、竹まばらな、低い裏庭の垣根を見ながら、二ツ三ツ庭下駄を動かして、あるくともなく其方へ進むで、

「外は何處なの。」

「すぐ、あの旅をする人が通りますよ、舊この清水も路傍にあつたんでございますと。」

「さうかい、まあ此方へ来て見な。」

といひながら、ぱたり／＼と緩く庭下駄を引摺つて、垣根間近になつた。正面に田畝を隔て、山懐がかすかに見える、垣根越に、山續きの故道を、のび上るやうにして覗いが、つと園が手を放した。夫人はつか／＼と寄つて、僵れるやうに前臥になつて、垣に両手をかけた勢、園は思はずあれといつて駈け

寄つた。

「奥様。」

「連れておいで、園、可いから、可いから、讚平の處へ連れておいで。」と言急にいふより早く、踏越さうとてか、垣の上へ足をあげた、胸がぶつかつて僵れかゝる、竹垣は、ぱりゝといふ音。堪りかねて小蔭から走り出した、女中頭は眞黒になつて、「えゝ！」といつて袂に縋ると、片手を垣に縋つて、半身を向うへ突出しながら、振返つた、サクに懐劍でピタと其額をあてた。夫人は敵と戦ふ勇士の女装したもののやうである。

打たれて女中頭は、後ざまに尻もちをついてあつといつた。

「疾く、」と園をさしまねきながら、一度見返る、清水は暗い中に白く流れて、あたりは透通る樹の葉の緑、水にも地にも月のかげがさした。風が颯と出て、組みかけた車の輻形の蜘蛛の圍は、はらりと破れて、眞直に一線線を引いて、おもりの黒いも

のは、ほたりと落ちた。山の下あたりを遙かに松明  
が通る。

「待つて下さいましな、まあ、待つて下さいましよ。讚さん、其處に居るの、眞暗でなんにも分りやしません。讚さん、待つて下さいましよ。」

「おい、此處だよ、な、此處に居らあな、けたゝましいぜえ、人が聞くと何だと思ふ。」

「でもあなたが早々と行らつしやるんだもの、私や此邊を歩いたことがないので、高足ばかりして、溝だか、橋だか、何だかもうまるで分りやしませんよ。」

「左様だらう、めつたにやあを前たちの歩行かねえ處よ。」

「そしてまあ、こんな暗い晩たらありませんねえ。おや、石ツころだ。さあ、」

「踏切つたか、」

「何うですか。」

「からだらしがねえなあ。」

「いゝえ、引くらかへしたの、何ともございませんでした。」 とつくばつて穿直した、氣勢である。

「危あぶえぜ、また何なんだつて追懸おつかけて來きたんだらう。  
あれほどいつて分わかつたぢやあないか、姫様ひいさまも納得なつとくを  
なすつたのに、お前めえばかり騒さわいでら。」と投なげる  
やうにいつた。しばらく黙だまつて、

「讚さんさん、」

「何どうした。」

「あなたまあ、大變たいへん言葉ことばづかひがぞんざいにおな  
んなすつて、そして職人しよくにんみ見たやうに荒あらつぽいのね  
え。」

「だつて、私あつしあ職人しよくにんぢやあねえか。お前めえまたそれ  
をはじめたぜ。だつて、趨勢なりゆきなら仕方しかたがねえや、母おつか  
はかうも生うみつけなかつたらうけれど、自分じぶんが好き  
ではじめた仕事しごとだ。何も細工場さいくばに坐すわつて鐵鎚かなづちをつか  
ひながら、侍はべり、候さむらい、參まらせませす、をやつてるにやあゝ  
たらねえ。」

「そりや、まあ其それでも可いいけれど、あなた何時いつお  
歸かへりなさいますの。何なんだかお出でかけなさりやうがな  
さりやうだから、それで私わたしあ後あとが案あんじられて、追懸おつか  
けて來きたんですよ。」

「だからよ、姫様ひいさまと、お前まへとが、何處どこかへ引越ひっこす  
か、それともお寺てらへ歸かへるかした後あとで歸かへるんだ。」

「それぢやあ何なの、もう姫様にはお逢ひなさら  
ないの。」

「未練が出るばかりだ。むかうばかりぢやあねえ、  
此方も怪いから始末にええねえや。何うするもんだ、  
其内にや何うかならうさ。」

「そんなことをおつしやつて、それぢやあ讚さん、  
あなた皆忘れつちまつたんですか。」

「忘れねえ。藤色の紋着を着てお傍に居た時分か  
ら、今日までだ、いや、今夜の今までだ、私あ忘れ  
ねえ。眞個だ。こんなことをいつちやあ濟まねえけ  
れど、鯉屋のあれが殺されたつて、そりや何に較べ  
ても較、べやうはねえ、可哀相でならないんだけれ  
ど、姫様にくらべちやあ、打まけた處半分も思やし  
ない。だから見な、よ、お園さん、體の可姦通ぢや  
あねえか。あひては坊主だつて今の世の中だ。殊に  
姫様は御主人だ。しかもな、母が命まで差上げてお  
育て申した方だ、死ぬだ母に濟まず、本人は可いに  
しろ、姫様といふ名に濟まねえや。世間にも濟まね  
えしよ、六ケしいこたあねえ、第一私あ自分に濟ま  
ねえぜ。餓鬼の時から叩き込むだ、大袈裟ぢやあね  
えが鑿と鐵鎚を持つ此の大事な腕で、汚らはしい、

坊主の媽々を抱いて濟むものかい。

しかし一か八かで、それもこれも打ちやつた。世の中にあ坊主を拝むもなアあつても、死ぬだ師匠を難有がるもなあねえ。へむ、くだらねえ、コチノ叩いたつて、何だけがものだ、五十六まで生きてようたあ思はずよ。

だから見ねえ、否應なしに、生身のしかも、うつしい女二人まで背負込むだぜ、勝手馴れめえと思つて私あ飯を焚いた、私あ生れてからはじめてだ。

姫様だつて、いろ男に一度飯を焚かせて食や、本望だらう、不足を聞く分はねえ。

といったやうなもの、細工盤のむかうに坐つて、嬉しさうに見て居られりや、私だつてうはの空だ。

此まゝ死ぬだつて此方でも怨はねえ。

處でだ、此間來る時土産に持つて來てくんなすつた、あの師匠が魂の入つた御像だ。可いかい、なるほどおかみさんが夢に見て騒いだやうに、何の因縁だか知らねえが、片一方の眼が潰れて居らあ。この

ためにやあ可哀相に、間違にもしろ、お袖さんが死  
だんだ。可、鑿を入れて直さうと、脂ばしらにくる  
んで眼の前へ持つて来ると、さあいけねえ。

お前も見て居たらう、二月の餘だ、夜も晝も、お  
もしろをかしい口一ツ利かないで、なやみ切つたが、  
何うしても直されねえ。こんな鈍い腕ぢやあねえ筈  
だが、待て、私あ片眠が見えねえんだ。めつかちの  
職人風情にやあ、此師匠の手の跡は何とも仕方がね  
えか不知と、さう思や、あきらめるより外あねえ。  
あきらめた日にやあ留める分だ。何うせ、名ばかり  
でも御主人の、一旦嫁いた、汝にやあ姫様といはな  
けりやあならねえ女と一室處に居る位だ。何のそん  
なものは打棄つて置けばいゝやうなもんだけれど、  
それぢやあ餘り、しつきりがねえ。身持は身持だ、  
腕は腕だ。鯖あ食つた口でも陀羅尼は讀まれさうな  
もんだ、と高を括つて居たが勘違ひ、第一師匠には  
義理があり、夢にまで見たといふ、おかみさんに對  
してもだ、殺されたお袖さんにつけても、手前が身  
體を棄てゝも可いぼどな、情婦が候とばかりで、遁  
を打つちやあ男でねえ。するほどのことさへすりや、

そりや姦通も可からうよ、ばくちも大酒も可からう  
が、なま半じゃくの、ちい／＼たもれが、人の女房  
もよく出来たと、かういはれちやあ業腹だ。何でも、  
この眼をあけなけりやと、こゝの道理を肯分けて貰  
つて、いまのさき姫様とすつぱり手を切つた。お前  
も知つてる、姫様のあの氣象よ。一言で埒があいた。  
こゝだと思つて氣を取直しや、わづかの間に眼が明  
いたわ、氣の故か知らねえが、一鑿で損じがなほつ  
た。あゝ、魂が残らうといふほどの細工、鯖を食つ  
た口ぢやあ經は讀めねえわけだ。

待構へてるおかみさんに、早速見せて喜ばさう。  
此の間からいくたび見せても、こんなこつちやあ／＼  
といひなすつた。今度のこれなら私が方で合點だ、  
人に見て貰つて、可いでございますか、といふや  
うな、そんな甘えんぢやあねえ。これでぐづ／＼い  
やあ叱り飛ばさあ、死ぬだ師匠のかみさんたあ言は  
せねえ。

まづこりや可いさ、處でいまこれが出来たからと  
いつて、役目は濟むだものにして、また舊の御席へ

御直り候へ、とやられるもんか。眼をねむつてやりや行るが、さうするとあの意地の悪い御像あ、今度は兩眼とも失くさうも分らねえ。極めた事は極めた事だ、きれたらさつぱりとすることだ。だがな、お園さん、姫様の御身分も、またいまの御境界も、そこはまた藤色の紋着に立歸つてよく知つてる。知つてゝすることだから可からうではないか。何だけがものだ。五十六まで生きようたあ思はねえ。

親もなし、兄弟もなし、一人ぼつち、おつかあと、姫様の夢をちゃんぽんに見てこれまで育つた位なもんだ。可いやねえ、お園さん、姫様は何もおつしやらねえぢやあねえか。悪く思ひなさんな、いひやうは些と亂暴だか知らねえけれど、構ふこたあねえ。お前ばかり騒いでるんだぜ、可いから歸むねえ、何も心配するこたあねえよ。」

お園はすゝり泣のうるんだ聲で、

「はい、もうよく分はわかりましたけれども、讚さん、あなたも分りますか、姫様は生きておいでなさりやあしますまいと思ひまして、……」

二人ともしばらく黙つた。ものゝあやめも分らなかつたのに、背負上と、結むだお園の繻子の帯と、髪と、襟脚の雪のやうな色とが、ちらりと見えて、「あれ！」といつて、ひしと讚平の胸に絶つた。壁の色があかるく見えて町家の廂合と思ふあたり、墨のやうな夜の空にかげも宿さず、ひらめきもせず、曇よりとして輪廓の正しからぬ炎の、青黒いのが然えもしないでぼんやり傳うた。

讚平は胸のあたりに、お園の額を擁して、ものゝいひぶりとはうらはらな、片眼こそ盲ひたれ、鼻の高い、細面で秀でた其の濃い眉のあたりに蒼味を帯びた、片眼を清しくあいて、キツと見たが、何やらいつて眼を瞑つた。燐火は何處で消えたか、分らず、失せて、またあやめも分たずなつた。

やゝあつて、といきをついて、讚平は思出したやうに呟いた。

「はてな、師匠が三年目の祥月命日、とお袖さんが死んだ日だ。」

そしてちやうど姫が自殺をした時であつた。が、これは敢て婦人を犠牲にしなれば、藝術が進まぬといふことを書いたものではない。

【完】